求道

第八卷
第壹號

京都帝國大學圖書

求道第八卷第一號目次

求道　信觀

◎念佛成佛是眞宗

◎惡平等と刑名主義　近角常觀

講話

◎眞の知識　金津香藏

告白

◎五六日中に死ぬる　坂倉はま子

雜錄

◎地獄は一定すみかぞかし

◎昨年中の信仰談話會

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷區森川町一番地》

毎土曜午後二時
第一求道會
《九段坂佛敎倶樂部》

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町說敎所》

求道　第八卷第壹號

念佛成佛是眞宗

一世を擧げて南無阿彌陀佛に歸向せねばならぬ時代になつて來た、人生は何物も當てにならぬ、世は五濁惡世、時は末法澆季である、此時に當りて人生唯一の光は南無阿彌陀佛である、南無阿彌陀佛は如來廻向の御聲である、慈父招喚の勅命である。

如來廻向の一語、實に是れ眞宗の生命である、全體廻向といふ文字は普通ならば我方より或物を廻らして如來にさし向ける意味である、是佛敎通途の意味に於ける廻向である、善を廻らして佛にさしむける、行を廻らして衆生にさしむける理想を廻らして社會にさしむける、信仰を求めて佛にさしむける、苦痛を訴へて如來にさしむける、歡喜を求めて我心をさしむける、救濟を求めて念佛をさしむける、人を救はんとして我力をさしむける、人に信を與へんとして我計ひをさしむける、一として自力廻向たらざるはなく、遂に此の如きの廻向の滿足せらるゝことはない、親鸞聖人の眞宗は此廻向の轉換にある、他力の極意は廻向の一轉にある、南無阿彌陀佛は凡聖自力の廻向に非す故に不廻向と名くるのである、然らば廻向の意義は如何、曰く廻向とは本願力廻向である、如來他力の廻向である、廻向とは如來大慈大悲の本願を發して南無阿彌陀佛の寶を廻らして我等一切衆生の上にさしむけたまふ招換の勅命である、爲衆開法藏、廣施功德寶、是である。吾人は唯ひたすらに此の如來大悲の廻向を信受する是れ即ち眞宗の根本義である、絶對他力の根源である。

此の如きは一往文字のみを讀み去るときは常套語として其深き意味を汲みとることが出來ぬ、此の如來廻向の意義は文字ではない、明らかに大悲廻向の御惠を實驗することによりて體得することが出來るのである、しかるに此如來廻向をいたゞくことをなさずして徒らに我等の方より廻向する態度に出つる故に皆自力となるのである、啻に我より理想を形作り善根を積み、之れを廻らして佛にさしむけ、衆生にさしむくることが自力廻向たるのみならず。信仰を得んとし、道を求めんとし、佛に歸依せんとして我より佛に向ふならば皆自力廻向である、他力廻向といふは佛自身より衆生に與へらるゝこと

である、故に他力廻向あらはれて、初めて彌陀佛が顯現して我等を救濟したまふ本意が明らかになるのである、夫故本願力廻向といふのである、されは此本願力廻向ありてこそ、初めて絶對他力の救濟の御力があらはれて下されたのである、故に廻向の一轉換によりて他力眞宗は興行されたと稱すべきである。

親鸞聖人教行信證の初に『謹て淨土眞宗を案するに二種の廻向あり、一には往相、二には還相、往相の廻向に就て眞實の教行信證あり』と示されたる是である、和讃に『彌陀の廻向成就して、往相還相ふたつなり、これらの廻向によりてこそ、心行ともにえしむなれ』といひ、又『如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を首としたまひて、大悲心をは成就せり』ともある、此如來廻向の一語によりて他力本願の絶對的救濟を示されたのである、否、他力救濟の眞面目は如來廻向の一語の下に露々堂々として十方衆生の上に光被せられたのである、大小の聖人、重輕の惡人皆同しく齊しく選擇大寶海に歸して念佛成佛すべし、是れ念佛成佛是眞宗の眞面目である。

歎異鈔に曰く、他力眞實の宗をあかせるもろ〳〵の聖教は、本願を信じ、念佛をまふさば佛に成る、其ほか何の學問かは往生の要なるべきや、是即ち念佛成佛是眞宗である、他力眞實の宗とは眞宗である、本願を信じ念佛をまうさば佛に成る、とは念佛成佛である、親鸞聖人九十年の教化も是に外ならぬ、眞宗根本の聖典たる教行信證といふも畢竟念佛成佛是眞宗である、他力眞實の宗をあかせる諸の聖教とは即ち顯淨土眞實の文類である、六軸の聖典は畢竟他力眞實のむね、即ち淨土眞宗を顯はせる文を一切聖教の中より類聚されたのである、其本旨は本願を信じ念佛をまふさば佛に成るといふことである、本願は教である、信じは信である、念佛をまふすは行である、佛に成るは證である、要するに教行信證といふことである、是れ他力眞實の宗をあかせるものゆへに顯淨土眞實と冠せられたのである、聖人が眞宗の教行證を敬信すと申されたは是である、故に眞宗は聖人獨創の意に非ずして大無量壽經を初めとして、七祖論家宗師擧て此淨土眞宗を開きて濁世の邪僞を導きたまふのである、殊に眞宗の名目に至りては聖人は善導を讃して深藉本願興眞宗といひ、法然聖人を嘆じて眞宗教證興片州と宣ふ、三國の祖師此一宗を興行す、此故に愚禿勸むる所更に私なしとの聖人の自白、實に聖人の眞精神である。

『往相の廻向ととくことは、彌陀の方便ときいたり、悲願の信行えしむれば、生死すなはち涅槃なり』是實に往相の廻向につきて眞實の教行信證あることを示されたものである、兎角、教行信證などいふときは何んとやらん四個の範疇が並べられてある樣なる感を起し安い、敢て範疇といふて不可なる譯ではなけれども、畢竟如來廻向によりて我等に與へらるゝ有樣を順序の如く示されたるに過ぎずして、實は一體一貫のものである、『彌陀の方便ときいたり』の文字は決して輕々に看過す可らざる一句である、『諸佛方便ときいたり、源空ひじりとしめしつゝ』とあると同意である、我等他力の大行大信を得ることは畢竟大悲の善巧方便時到れる結果である、是皆如來本願の我等に屆きたる時である。

『往相の廻向を案するに大行あり、大信あり、大行とは無碍光如來の名を稱するなり、斯の行は即是諸の善法を攝し、諸の德本を具せり、極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり、故に大行と名く、大信心とは則是れ長生不死の神方、乃至極速圓融の白道、眞如一實の信海なり』是口に稱ふる念佛、心に穫得する信心、皆是れ如來より廻向したまふ所である、全體大行といふことは我等が口に稱ふる念佛である、是は佛の我に廻向したまふ御名である、佛より名のりたまふ御名、我が稱ふる御名、偏へに我等をたすけんために如來より與へたまふ所である、十方世界の衆生に傳へんとて十方の諸佛の稱揚讃嘆したまふ所にして、源は彌陀第十七の大悲の願より出づるのである、我等此南無阿彌陀佛の御名を聞くことを得るは決して容易の事ではない、前にも云へるが如く諸佛方便の時到つた結果といふが是である、釋迦牟尼佛五濁惡世に出現して末法濁亂の惡逆の衆生に此彌陀の名號を慇懃に附屬したまへる御恩によりて大悲招喚の慈父の御聲を聞くことを得るのである、聞く一念に口に稱へ出すのが稱名である、念佛である、着物は未だ着ずと雖着物たるを失はぬ、然れども着ぬ着物とてはなからう、否着なければ着物たるの所詮はない、南無阿彌陀佛は未だ口に稱へずとも稱名念佛たるに違ひはない、然れども之をいたゞきても稱へざらんは詮なく候、勿論親より着物を頂くときは着んとする時既に之を頂戴し了するが如く『彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をばとぐるなりと信じて、念佛まふさんとおもひたつこゝろのおこるときすなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり』されど

次の一念には稱へずに居られぬ、さればこそ大行とは無碍光如來の御名を稱ふるなりと仰せられたのである。

全體、行と信とは二者別ではない、否全く一つである『親鸞におきては唯念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよき人の仰せをかうぶりて信ずるほかに別の仔細なきなり』である、何を信するかと言へばたゞ念佛して彌陀にたすけられる事を信するのである、信じたらば勿論信ずる如くたゞ念佛するのである、換言せば信するといふは即ち行するのである、『彌陀の名號となへつゝ、信心まことにうるひと』是であるかくの如く大行と大信とは畢竟如來廻向の賜である、所信とか能信とか、所行とか能行とか六ヶ布き法文沙汰をすべきではない、聞其名號、信心歡喜乃至一念、名號を聞き、信じ、稱へ、自然の淨土に往生するのである、かく言へばとて決して又を疎かにするのではない、光明名號の因緣によりて一念信樂開發の時長生不死の大信心を獲得するのである、是れ名號の聞こえた時であつて、また稱名の口にあらはるゝ時である實に是れ如來選擇の願心より發起し、大聖矜哀の善巧方便時到りた時である。『若不生者のちかひかへ、信樂まことに時到り』とあるのが是である。

『信は願より生すれば、念佛成佛自然なり』とは、上來味ひ來りたる大行大信の如來廻向の自然なるを示されたるものである、『自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはず』とは行信の廻向は直に證の妙界を自然に廻向せらるゝことを示されたるものである、既に擧げたる和讃に『往相の廻向ととくことは、彌陀の方便ときいたり、悲願の信行えしむれば、生死すなはち涅槃なり』といひ、能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃といふ、皆是信の一念直に即得往生の境に入りて入正定聚必至滅度を得る一貫の實驗である、是れ『念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり』との文字言語に言ひ盡きせぬ味がある。凡聖逆謗齊廻入、如衆水入海一味といひ、大小の聖人重輕の惡人皆同しく齊しく、選擇大寶海に歸して念佛成佛すべしとある皆是れてある、前に言へる如く成佛は是れ證である。

證につきて眞宗の特徴として注意すべき二點がある、即ち入正定聚と必至滅度である、是れ信仰の一念に前念命終後念即生の境界に入るものにして所謂即得往生として既に業に往生決定し了るのである、信の一念即ち攝取不捨の故に正定聚に住するのである、殊に注意すべきは信の一念にて往生の業

事成辨して必至滅度の資格を既に得ることである、歎異鈔に所謂『彌陀の光明にてらされまゐらするゆへに一念發起するとき金剛の信心をたまはりぬれば既に定聚の位におさめしめたまひて命終すれば、もろ〳〵の煩惱惡障を轉じて無生忍をさとらしめたまふなり』一念發起の時命終するのである。煩惱惡障を轉ずるのである、此已上に成佛のために一點も不足はないのである、是れ眞宗の特色にて臨終待つことなく來迎たのむことなき所以である、二に注意すべき點はかく往生決定し、是心作佛是心是佛の佛心廻向を得たれども滅度の眞證を實現するは順次生であるといふことである、我等此世にあらんかぎりは妄念の凡夫である、煩惱具足の身である、火宅無常の世界である、そらごと、たはごと、まことあることなき虛僞不實の穢土である事を忘れてはならぬ、彼土入證得果の淨土門の特色は此處にある、欣淨厭穢は他力淨土門の究極の目的である、彼の西方寂靜無爲の樂は畢竟逍遙として有無を離れたり、此境に至りてこそ自然の淨土である、併し此の如き自然の眞報土にいたる事は畢竟眞實の信行を得るからである、和讃に曰く、念佛成佛是眞宗、萬行諸善これ假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ 聖道權假の方便に、衆生ひさしくとどまりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ、是所謂自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはずと同意味である。選擇集に生死之家には疑を以て所止とし、涅槃之城には信を以て能入とすと仰せられたも亦畢竟是である。

此の如き如來廻向の敎行信證が我等一切衆生の上に與へらるゝのが念佛成佛是眞宗である、選擇本願念佛の大寶海である、如何なる者に向ても此廻向がある、如何なる時に向ても此廻向がある、如何なる業に向ても此廻向がある、如何なる罪に向ても此廻向がある、善人に向てすら此廻向がある、況んや惡人に向て此廻向あらざらんや、初果の聖者、二乘の聲聞に向てすら此廻向がある、況んや一切群生海に向て此廻向あらざらんや、五逆謗法の者に向ては此廻向ならでは他に與へらるゝものはない、否世間人道に於て助け得ざるのみならず三世十方の諸佛の敎に於ても救はるべからざる無邊の極濁惡の者を救濟したまふの大慈大悲の超世無上の本願である。五濁惡時、惡世界、惡衆生、惡見、惡煩惱、惡邪、無信の盛なる時に於て唯一救濟の彌陀の名號である、十惡、五逆、四重、

謗法、闡提、破戒、破見等の罪惡の爲に特に悲憐の涙を垂れたまふ阿彌陀佛である、五逆罪の根本は誹謗正法の大邪見より來るのである、此の如き凍結氷塊たる謗法闡提を融ろかす無碍光の慈悲である、未造業の逆謗に向て抑止嚴制を下したる釋尊も、已造業の五逆十惡具諸不善の下品下生者臨終の一念に及びては、汝若不能念者應稱無量壽佛の彌陀の攝取を說きたまふのである、此如く十方群生海此行信に歸命したてまつる一念、攝取して捨てたまはず故に阿彌陀佛と名けたてまつる、是を他力といひ、眞宗といふ、和讃に曰く、名號不思議の海水は、逆謗の屍骸もとどまらず、衆惡の萬川歸しぬれば、功德のうしほに一味なり、盡十方無碍光の、大悲大願の海水に、煩惱の衆流歸しぬれば、智慧のうしほに一味なり、是即ち念佛成佛是眞宗である。

上の讃に、念佛成佛是眞宗、萬行諸善之假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ、といふは、此凡聖逆謗齊廻入、如衆水入海一味の弘誓一乘海を知らずして萬行諸善の小路に止りて、眞に涅槃一味の眞證を知らざることを戒めたまふたのである、『本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとらしむ』是弘誓一乘海の力である、此本願力を知らざるものは、定散二善九品の差別に止りて、極惡最下の人の爲に極善最上の大悲あることを知らぬ、此に於て眞假の門戸邪正の道路が分からぬやうになる、是法然聖人親鸞聖人の流罪の起る本である、是眞佛土卷、化身土卷の起る所以である、逆惡を攝すといふは逆惡を恕するの意味ではない、逆惡を直ちに救濟するのである、翻へさしむるのである、感化することである、懺悔せしむることである、融化せしむるのである、無碍光の利益より、威德廣大の信をえて、かならす煩惱のこほりとけ、すなはち菩提のみづとなる、罪障功德の體となる、氷と水のごとくにて、氷多きに水多し、障多きに德多し、此大悲顯現の下に四海の人皆大慈父の兄弟として、同一念佛無別道故の選擇大寶海に流れ込むのである、やがて是れ極樂無爲涅槃界に至る所以である、是即ち橫超他力の眞味にして聖人は、大願淸淨の報土には品位階次を言はず一念須臾の間に速疾に無上正眞道を超證すと言はれたる所以である、是即自然の淨土である、此選擇本願已外の聖道淨土のあらゆる自力頓漸の敎は權假方便にして、遂に相對差別敎である、萬行諸善の小路である、八萬四千の假門である。

五濁惡世、末法度季の今日にして萬行諸善の小路を辿らんとする是れ權假方便に迷へるものである、遂には益々闇黑の世界となる、愈々苦海の沈淪をいかゞすべき、無明長夜の大燈炬ならてはいかて此重罪を濟度すべき、生死大海の大船筏ならては、いかてか此闇黑を照すべき、此に於てや南無阿彌陀佛の弘願一乘海ならでは道はない『聖道權假の方便に、衆生ひさしくとどまりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ』法然聖人、親鸞聖人が其他の人々の死罪、流罪の御苦勞も、畢竟此弘願一乘をして今日惡逆の我等に知らしむるが爲である、選擇本願を五濁惡世の有情に信ぜしめたまふ爲である、『濁世の有情をあはれみて、勢至念佛すゝめしむ、信心のひとを攝取して、淨土に歸入せしめけり』實に法然聖人は大勢至菩薩自ら此智慧の念佛、無上の信心を敎えたまふたのである、たとひ法然聖人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候、地獄一定の我等唯信ずるの外はない、唯故聖人のわたらせ給ふ所へ參るべしと思ふなりと、是親鸞聖人が法然聖人の敎を信したまふ態度である、我等も兩聖人のわたらせたまふ所へ參らしていたゞくのである、若し兩聖人の御苦勞なかりせばいかでか他力の大行大信をいたゞく事を得べき、兩聖人の御苦勞はそくばくの業をもちける我等を、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたしけなさを、知らして下さるのである、兩聖人の出現なかりせば、謗法闡提の輩いかでか選擇本願をきゝて廻心懺悔したてまつるべき、希くば世の惡見、惡煩惱、惡邪無信、謗法、闡提、破戒、破見の人皆選擇大寶海に歸して念佛成佛せんことを。南無阿彌陀佛々々々々々々。

されど記せよ、我等は決して此世に於て思ふが如く人を憐み、悲み、救ふことは出來ぬのである、たとひ信心に伴ふ常行大悲の德ありと雖、決して我等が思ふさまに救濟することは出來ぬ、我等の力を以て親として子を救ふべからざることあり、子として親を助くべからざることあり、此に至りて初めて還相廻向の大に意味深きことを知る、若し現世に於て思ふが如く利物度生の働きをなし、此世にして理想の濟度をなし得るならば、佛何ぞ淨土を建立したまはん、又何ぞ還相の廻向を成就したまふとあるべき、『還相の廻向ととくとは、利他敎化の果をえしめ、すなはち諸有に廻入して、普賢の德を修するなり』我等思ひ存分衆生を濟度するは無上涅槃を證したる時實現するのである、『願土にいたれはすみやかに、無上涅槃を證してぞ、すなはち大悲を起すなり、之を廻向となづけたり』

此に至りて淨土眞宗の廻向の意味は飽まで如來廻向である、方向轉換である、還相度生も如來大悲の廻向である、されば之を聖人は證卷に『誠に知りぬ大涅槃を證する事は願力の廻向に藉りてなり、還相の利益は利他の正意を顯す也』とある、我等此世にありて我等の心を廻らし、我等が思をさしむけ濟度することが出來るなれば矢張自力の廻向である、如來の大悲を持ちかへて我心の儘にせんとする計ひである、生々世々の父母兄弟何れも〳〵此順次生に佛になりてたすくる事が出來るのである、此に至りて心の儘に慈悲を行ひ得べきである、されど此還相廻向は淨土に入りて後廻向にあづかるのではない、歸命の一念、念佛の一を以て廻向せらるゝことを忘れてはならぬ、『今生にいかに、いとをし不便と思ふとも存知のごとくたすけかたければ此慈悲始終なし、しかれば念佛まうすのみぞ、すえとほりたる大慈悲心にて候べき』、一南無阿彌陀佛の廻向である、念佛即ち大慈悲である、信心即ち願作佛心、度衆生心である、設我得佛は如來の願作佛心である、若不生者不取正覺は如來の度衆生心である、衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむる大慈大悲心である、かくて如來の願作佛心、度衆生心の其儘我等に與へられて大行大信の一念やかて淨土にまいりて思ふが如く一切衆生を平等に濟度し得べき大慈悲心を獲得せしめらるゝのである、嗚呼我等が口にあらはるゝ南無阿彌陀佛は是平等の大悲である、衆生攝取の度衆生心である、天地宇宙一切衆生南無阿彌陀佛の一つで助けらるゝのである。南無阿彌陀佛。

或る人庄吉といへる同行に
「おまえの後生ぼだうなあるか」
と問ひました。
「まう手柏さ〳〵」
と答へければ、かさねて
「それには何か證據あるや」
と尋ねしに、庄吉は早速佛前を指しながら、
「有るとも〳〵、あの如來樣の御立向ての御姿が、この庄吉がただで助かる御證據ぢや」と。

○

豊前の眞次郎は、淨土宗の門徒なりしが、不思議か因緣にて深く眞宗に歸依し、無二の信者となれり。且那寺の住僧
「眞次郎、おまえは眞宗にせい込んでゆくぢやないか」
と詰りしに、
「イヤ私は眞宗にせい込んでゆかれと、眞宗が私の胸にせり込んでまいりました。」
と答へたりしと。

『信仰小話』

信觀

惡平等と刑名主義

近時思想界の問題の徹底せざること甚だしきものである、信仰の見地より此等の亂雜なる思想に對して正鵠穩健なる指導を與ふることは、たしかに信仰者の務である、我等は時事問題や、政治問題に觸るゝことは好まない、寧ろ我等は思想界の根本に向て其解決を求むるものである。

現時日本に於て著しく徹底せざる二個の思潮が戰ひつゝある、一方は惡平等とても云ふべきものである、一方は刑名主義とでも云ふべきものである、此二潮流に向て適當なる命名を見出し得ない、私か今言はんとする所は廣く思想界の問題なるが故に、何れの部分に於ても此二潮流があらはれてあることを認める、前者は文學上に於ける自然主義の如き、日常生活に於ける放縱主義の如きを初めとして、科學の立場より萬事につきて空見に陷り、哲學の立場より有見に陷り、理窟一方に陷りて惡平等を主張し、感情に趨りて差別を無視し、自己の欲望に任せて勝手に振舞はんとするものである、或は覊絆を脱するとか、自由を求むるとか、解放されたる思想とか、囚はれを脱するとか、種々なる美名の下に惡平等に陷るのである。信仰上の問題の如き罪惡救濟の言の下に惡くとも可いと誤解し、善惡不二であるからといふて善惡の區別を無視するが如き皆是である、我國に於ける社會主義の如きも實際の問題より寧ろ此種の思想の問題と云ふべきである、又生活の問題より此種の感情の問題たるの感がある、之を救はんとするには物質經營よりも思想の惡平等を救はねばならぬのである、生産の不平均よりも人心の不平均を療治せねばならぬ、現今種々なる問題を惹起しつゝあるは皆惡平等の思想より起るものである、此等の惡平等思想は一定の形を有せざる故に、感情的に奔るときは外部の壓迫によりて狂妄なる破壞主義に陷る樣な事が出來る、又事實的研究の立脚地より進みたる史論が、時世順應的思想と便宜的に結びつきて、南北朝對立問題を惹起すといふ如き皆不徹底なる思想の産物である、之を要するに畢竟惡平等の不健全なる思想の結果として此の如き種々なる惡現象を生ずるのである。

此の如き惡思想を滅すには必ず健全なる信仰でなければならぬ、誤れる思想の根本を飜すに非れば、決して惡思想を滅盡することは出來ぬ、しかるに此等の惡思想を對治する方法が頗る肯綮に當らぬ、現時頻りに講ぜられつゝある方法が皆律法主義である、勿論健全なる信仰には健全なる戒律の伴ふ

ものであるが、根本の源泉たる信仰を興べずして、他より强制的に諸の教訓、實行、規律を以て抑壓せんとするが如きは皆律法主義の遣り方である、此等の方法が中心の懺悔改悛を促さずして、一時的に沈默せしむるに止ることは甚だ惜しむべきことである、而して一層甚しきに至りて追窮其極に達して、嚴峻なる刑名主義を以て之に臨むが如きは決して人をして其惡を悛めしめ、其非を悔ゐしむる所以でない、餘地なき手段を用ゐて一點の假借なきが如きは、一見頗る徹底したるが如き看をなせども、是亦一種の空見に陷りたるものにして、決して人をして正義に返らしむる方法ではない、惡思想の人を肉體的に盡却することを勉めずして、其思想を滌さしめて、其人を活かし、其罪を滅して其身を救ふの考があらねばならぬ、古來思想を滅さずして、却て其人を滅すことを謀りて、無益有害なりしことは度々である、若し正しき信仰に入らしむれば如何なる惡思想でも滌然として悔悟せしむることが出來る、現に今回の無政府主義者中死刑宣告後其執行に至るまで此の如き少日子の間にも拘はらず、忽に信仰に入りて從來の思想を滌へし、眞正の思想に立返りて、眞摯の態度を以て念佛を唱へる樣になつたものが二三人あつたのである、其或者は從來の無政府が如何にも空漠なる夢に過ぎなかつたことを悟りて大に懺悔し、初めて眞人生に立歸りたることを喜び、一日にても此の如き眞生活に入りて念佛を唱へて此の世を終るといふは人間に生れ甲斐のあつたといふて立派に自覺の境界に入り、或者は今に於て何の遺憾もなきなれど、日本固有の道德に傷けたといふ一點が千秋の恨事であるといふて懺悔したといふことである、或者は死する身を阿彌陀と共に雪見かなと永刧の生命を樂んだといふことである、此の如く信仰の力によりてこそ如何なる惡思想も滌へして眞正の道に立歸るのである。

然るに動もすれば惡平等の誤謬なる思想を以て恰も一個の確然たる主義であるかの如く取扱ひて、此に向て改悛懺悔の餘地なきが如く考ふるは、却て此等の惡思想を以て根據あるものゝ如く取扱ふことで、其思想を滅する方法としても頗る不得策である、全體律法主義を以て人を導かんとするは、たとひ道德修養の事たりと雖一時的誘導的にして恰も弓を張れるが如く、壓力去れば忽にして原の狀態に歸るものである、若し信仰の力によりて根本的に精神が一轉したときは、恰も弓を折りたるが如く其彈力がなくなるのである、故に徒らに律法主義を以て人を導かんとするは何の効　ない、況んや法律嚴刑を以て威嚇的に之を抑壓せんとするが如きは、或意味に於て何時迄も惡思想を遺す者にして、古來刑名主義が其効を奏する事なきは明らかである、私は信仰的立脚地より左のことを敢て斷言する事を憚らない、近時殘忍なる犯罪の屢々あらはるゝは、たしかに嚴刑主義の結果なる事は明らかである、嘗て日露戰爭後に於て內心の煩悶に堪へかねて自殺者の多かつた事があるが、近時は嚴刑主義の結果として殘酷なる犯罪が多い、是は信仰的に人世を達觀したる斷言なるが故に、信仰の經驗のなき人には分からねども、事實的に說明して見れば、嚴刑を免れ其罪跡を湮滅せんが爲に殘忍なることを敢てし、憐れなる無辜の小兒まで殘殺することを敢てする樣になる、殘酷なる犯罪者が劇合に檢擧されないのは、恐くは個人的の怨恨よりも恐くは嚴刑に對する防禦として、爲さでもよきことを敢てするものであらう、威嚇主義なるものゝ慘害實に恐るべきものである、古來天災地變の如き天然の出來事に對してすら爲政者は猛省を怠らなかつた、況んや明らかに人心の荒凉を明示する人事に對しては大に心を潛めて自ら省るべきである、而して人心の歸向を正しくする天職を有する吾人宗教家は大に其德化の及ばざるを慚愧せねばならぬ、そして其思想の根本に向て忠言を怠りてはならぬ、是敢て微衷を披瀝せざるを得ぬ所以である。

猶信仰の立脚地より前記二個の思潮に對する態度につきて詳言せねばならぬ、世上宗教家動もすれば、前者の惡平等に對して嚴正なる指導を怠るが如き恐がある、世間往々現時思想變遷の時代として知らず識らずの間、寬容の態度をとりて輕々看過せんとするが如きことあらば是大に不可である、抑々世上法律主義、刑名主義が大に其威を揮はんとするは、宗教家が其惡平等に對して一步も假借するところなく、信仰を以て眞正の道に立歸らしむることを勉めぬからである、世間往々惡思想を輕々看過せんとするだけ其だけ、之に對する反動として律法主義が頭を擡げんとするのである、而して其律法主義が何等の効を奏せぬととなる、故に宗教家は眞實の信仰は嚴肅なる戒律を生せざるべからざる所以を明らかにして、惡平等に對して一步も假借する所なくして眞正の信仰に導きて其非を悟らしめ、自覺せしむることを勉めねばならぬ。

此に於てや深く信仰問題の內容に立入りて辨ずる必要がある、絕對の信仰に入るときは必ず相對事物に一步も亂るべからざる道ある事を悟る、眞の平等を認むるときは必ず差別的秩序の存在を認めざるを得ぬ、若し絕對にして相對界に存在し得ない絕對ならば眞の絕對ではない、若し平等が山を夷にし、谷を埋めて平等と云ふならば、夫れこそ實に惡平等である、罪惡の者を特に憐みたまふ絕對大悲の本願をきかば、如何なる罪惡の者も慚愧の心を起して其恩德を感謝するの念を生ずるのである、此に於てや明らかに嚴肅なる相對差別の道德倫常を生じ來るのである、萬が一にも罪惡を憐みたまふ本願

なるがゆゑに罪惡でもよろしいといふ樣なる意味に誤解するならば大なる邪見である、罪惡を悲憐する大悲のやるせなき切々哀々の親心の爲に其大悲骨髓に徹入して此に初めて如何なる罪惡のものも中心廻心懺悔の念を生ずるのである、かくの如く實に無限平等の大悲は明らかに相對界の道を生ずるのである、是即ち眞實の信仰は眞實の國家、道德、倫常を生ずる所以である、佛敎を理論的に研究する人が平等即差別とか事即而眞とかいふことを理窟的に云ふものは多けれども、此眞味を實驗せねば世の惡平等思想の根底を全然融和して根絶することは出來ぬ。

かくの如く眞實の信仰を以て眞正の秩序的精神を生ぜしむることが出來る、しかるに又他の一方には惡平等を退治せんと欲して律法主義を以て之を律せんとするは亦何等の効もない、たとい宗敎でも動もすれば信仰問題と道德問題とを別にして取扱ひて、恰も二重の主義を以て導く樣に感ぜしむることがある、たとへば眞諦俗諦といふことを別々に考へ、外には王法、內心には信心といふことを、相關せずして二重の原理の如く考ふるならば大なる誤である、故に苟し眞諦信仰の力を以て救はずして徒らに俗諦道德のみを如何に强制しても其効力はない、況んや物質的施設や法律嚴刑を以て如何に之に迫るとも、決して中心の懺悔を促すことは出來ぬ、否若し行政法律と雖、若し眞實信仰の立場に立ちて之を運用するならば、法律行政即ち信仰となりて、是こそ理想の極、仁政の實現なれども、現時に於ては毫も之を認め得ざるのみならず、徒らに嚴峻なる刑名主義に陷りて國政をして絕對大悲の下に如何なる者と雖其仁慈に感泣せしむるの餘地を存せない、是實に殺人劍、活人劍の分るゝ所である、實に一毫の差千里を生ずることである、此に於て眞に本願圓頓一乘の御惠によりて逆惡を攝取したまふにあらずんば、佛法、王法、一體の眞理に徹底するものと云ふことが出來ぬ。

世上動もすれば佛法即世法の意味を惡しく理解して、徒らに眞を認めざる世法を以て即佛法なりとして、恰も絕對の者であるかの如く考へて居る者がある、甚だしきに至りては木の虫を殺すは大の虫を助けるのであるといふ樣な考を以て、惡しき者を殺すのは慈悲であるなど、いふ樣な誤解をなしつゝあるものがある、資生產業即實相といふことを得手に解釋して、實業が即佛法なりと云ふて、世法愛染の儘を佛法なりと云ふならば大なる誤である、世の禪學者流は動もすれば極端なることを遂行するを以て徹底したること、考へて、世法即佛法の美名の下に、眞の光明を認めざる律法主義、刑名主義を以て恰も絕對であるかの如く誤解することがある、是最も戒心すべきである。

又丁度此と正反對に世上には宗敎と國家とを全然相容れざるものゝ如く考へて、宗敎は非國家主義なる者の樣に說きつゝあるものがある、寧ろ此の如く說くを以て宗敎の名譽の如く考へつゝあるものがある、一面より云へば頗る超然として高尙なるが如きも、此の如き宗敎ならば國家の下に存在することは出來ぬものにして、國家も亦其存在を許すべからざることになる、是れ神を說き、信仰を說くも、矢張り相對的に考へて、國家と對立して宗敎を立てんとするものにして、頗る不穩健なる思想である、世上國家宗敎の衝突を說くものあるは、確かに此如き考を以て宗敎を說くからである、斷じて言ふ、宗敎は國家と脊馳するのではない、絕對の信仰ならば國家をして眞實信仰の意義に叶ふ樣に導くものである、若し然らずして根本義に於て相容れざる如き考を以て、二者の關係を見るならば、此の如き宗敎自ら遁世するに非れば、遂には國家に對して反抗的態度をとる樣になる、是亦大に戒むべきである。

已上は刻下我國に於ける二個の思想界の潮流の大勢につきて信仰上の立場より腹藏なく忠言を試みたのである、併已上の言論は如何にも現代の思想及政治の險惡なるを見て痛心の餘り、胸臆を披瀝したものである、されど已上の忠言を眞に理解するには是非とも絕對他力の信仰を獲得せなければ分からぬ、右二個の思想も絕對の信仰に至れは其誤謬を自覺して、眞の自然、眞の法則を味ひ得るのである、信仰には自然の味がある、然れども彼放縱なる自然主義、無秩序の惡平等にあらずして、無限平等の大悲を味ひて、願力自然の力强き自動的自發的の自然である、又一面には信仰にはたしかに法則と云はるべき味がある、然れども律法主義、刑名主義の法則にあらずして、一たび內心に大悲の救濟を信樂すれは、自然の力によりて諸の所爲の上に、健全に秩序的に實行せしめらるゝ法則がある、故に親鸞聖人は他力の信仰を自然の法則と申されてある、此の如く眞の信仰に至りて現代思想界の混雜を救ふべきである、然れども既に前に述ぶるが如く、此妙味は信仰に入りてのみ實驗さるゝものであつて、理窟的に評論的に論議すべきものでない、冀くば上下朝野信仰の一によりて大和融の世界を實現せんことを。

聖德太子の十七憲法の如きは實に此佛敎の眞精神を以て國家の制度の上に實現されたるものにして、此精神は千歲不磨のものである、而して親鸞聖人の念佛成佛是眞宗は、其眞髓を攫みて一信仰として、やがて一切善惡の衆生の心中に傳へたまひ、特に末代濁世の惡人救濟の眞意を傳へたまふのである、實に今や時世暗澹として正に再び其光輝を發揚して無明の人生を照耀すべきの時である、たしかに淨邦緣熟の時來れりといふべきである、既に有緣の人は大悲海中に轉入せり、問題は各自の心頭にある、冀くは同一念佛の一道によりて四海兄弟の信海を實現せんことを。

講話

眞の知識

（求道學會日曜講話）

近角常觀

一

今日の題は『眞の知識』であります。『眞の知識』とは、親鸞聖人が御師匠法然聖人の事を喜びて、眞の知識と仰せられた。親鸞聖人の『和讃』中にも、法然聖人の事を讃歎なされて、

諸佛方便ときいたり、　源空ひじりとしめしつゝ、
無上の信心おしへてぞ、　涅槃のかどをばひらきける。
眞の知識にあふことは、　かたきがなかになをかたし
流轉輪廻のきはなきは、　疑情のさはりにしくぞなき。

とお示し下されて、親鸞聖人が法然聖人に値ひ、如來本願の御謂れを聽く事を得たは、全く諸佛方便時至りて、此の眞の善知識に値ひ、此の本題の一道を聽聞する事が出來たのである。と之が親鸞聖人御一代の御喜びである。其處て本年は御存知の如く、法然聖人の恰も七百年の御遠忌に當り、又親鸞聖人の六百五十回忌に當る尊き年柄て、殊に御存知の如く法然聖人の御往生日は今月の廿五日である。『和讃』の中にも、

本師源空命終時、　建暦第二壬申歳

初春下旬第五日、　淨土に還歸せしめけり。

とあつて、此の一月二十五日が七百年前法然聖人のお隱れなされた日に當るのである。夫れ故今日は、其の法然聖人の御教化の趣きを頂かせて貰ひ、殊に親鸞聖人が如何にお頂きなされたかを話さうと思ひ、此の題を出したのであります。

さて此の眞の知識といふお言葉を叮嚀に言うと長くなる。眞の知識とは、眞とは或は假に對し、或は僞に對し、まことといふ言葉である。まことの眞のお心を知らせて下された善知識故、法然聖人の事を斯く眞の知識と仰せられたのである。其處て、段々に話す事としまして、其の眞のまことの知識と、親鸞聖人が法然聖人の事をお喜びなされたは、法然聖人の御教化は、眞實の佛の廣大な思召を知らせて下されたのである。夫れ故其處を親鸞聖人が法然聖人よりお頂きなされ、其の如來のまことを知らせて下されたまことの眞の知識とお喜びなされたのである。初めの『和讃』に「諸佛方便ときいたり、源空ひじりとしめしつゝ、無上の信心おしへてぞ、涅槃のかどをばひらきける。」――法然聖人が日本に現はれ南無阿彌陀佛の一法を知らせて下されたは、三世十方諸佛の方便の時至り、此の佛の遣る願無き心を知らすとの諸佛御方便の時が到來して、本師源空が日本に現はれて下されたのである。又「眞の智識にあふことは、難きがなかになを難し、流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなき」――斯かる眞の知識に値ふ事は、難きが中に猶ほ難し實に難中の至難である。此の眞の佛の惠みを頂くか、頂かぬが、流轉輪廻の分れ目である、此の眞の知識の御教化を頂けよ、とお示し下されたのである。

其處て、其の法然聖人の御教化は何うかと言うに、之に就きては此の兩三年間、いつも法然聖人の御教化の選擇本願念佛といふ事を申して居る。此の事は常に言ふ事故、詳しく言ふに及ばぬけれども、法然聖人が御一代の御勸めの骨目をお示し下されたが『選擇集』てある。其の『選擇集』には如何なる事がお示し下されてあるかといふに即ち一番初めの題號にある「選擇本願念佛集、南無阿彌陀佛、往生の業には念佛を本と爲す」の文てある。之は誰も知つて居ることてあるが、法然聖人一代の御教化は此の外に無い。「選擇本願南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」――要をつまめば、選擇本願念佛とは、佛が此の罪業の私を助けんとの思し召してある。我々善い事する事も出來ねば、行ひを正しくするとも出來ぬ。有りと有る事仕ようとしても、何一つ出來ぬ我々てある。其何れの行も及ばぬ、何れの道も絶え果てた、其生死海中に惑溺して居る我々を哀れみて、其の者を助けんとある阿彌陀佛の御本願、之が選擇本願てある。其の何れの行ても助からぬ者を如何にして助けようか、其の助からぬ者を必ず助けずには措かぬぞ、との遣る願無きお心が此の本願の大もとてあり、其のお心の儘が五劫永劫の御苦勞て、其の御苦勞により其のお心の儘が南無阿彌陀佛の名號と現はれ、夫れを佛より名乘りかけ、之を我々に知らさずには措かぬとお誓ひ下されたのてある。夫れ故此南無阿彌陀佛の六字名號は、此の惡しき心の止まぬお互ひが、南無阿彌陀佛々々々と、極めて頂き易き所の佛の御名乘りてあつて、之れが選擇本願南無阿彌陀佛の廣大な御みのりてある。抑々阿彌陀佛本願の起りといへば此の外に無い。十方世界の淺間しき我々一人々々の者、生死の海中に苦しんて居る我々苦しみの者、其の者を哀れみ下さる遣る願無きお心より、如何にもして其の者を救はんとの廣大な思召から顯はれ下された阿彌陀佛。其のお心がもとになり、其のお心が凝り固つて出來上つて下された南無阿彌陀佛の御本願。故に佛の姿も心も願も行も、此の南無阿彌陀佛の六字の外には無いのてある。此の南無阿彌陀佛を以て我々に向うて下さるが、阿彌陀佛の廣大なる選擇本願念佛の御哀れみてあるぞよ。十方の衆生は唯此の念佛ばかりてあるぞよ。南無阿彌陀佛々々々と頂く一つてあるぞよ。と、之れをお示し下されたが法然聖人選擇本願念佛の御教化てある。

色々話しつゝ自分ながら喜ばせて貰ふことになりますが、猶ほも一つもとに戻りて言ふならば、全體阿彌陀佛が十方衆生を斯くの如く助けんと思し召し、遣る願無きお心より正覺を取りて阿彌陀佛とおなり下された。其の阿彌陀佛の御本意は、此の我が心を十方衆生に屆け度い、茲に南無阿彌陀佛の吾が名前があることを、有りと有る衆生に知らせ度いと、之が阿彌陀佛の廣大なお心を知らせて下さる御本意てある。夫れ故先づ阿彌陀佛が我々を南無阿彌陀佛を以て助け下さる遣る願無きお心の先き掛けとして、兎も角此の南無阿彌陀佛の我々の上に在る事を知らせ度い、此の南無阿彌陀佛の六字は、有りと有る衆生を助ける我が親心てあるといふ事を、十方の衆生に行き渡らせ度い。夫を知らす爲には、十方の諸佛が皆な一樣に此の吾が名を稱へて十方の衆生に屆けるやうに、又

恒沙の薩埵も此の名號を稱して普く世界に行き渡らせるやうにと、之が第十七願の御意である。又『大經』四十八願の畢りに在る『三誓の偈』にも、

我佛道を成ずるに至らば、名聲十方に超えん。究竟して聞ゆる所なくば、誓つて正覺を成らじ。

とある。早い話が私共お慈悲に氣のついて信仰に入る時に、何も深い道理理屈を聞いて信仰に入るのでは無い。お慈悲に氣のつく一念に信仰に入るには違はぬが、其の信仰に入る先き掛けとして、早くより南無阿彌陀佛の名前を聞き廣大の佛在しますといふ事を前より聞かせて貰うて居る。夫れが御緣となりて、遂に彌々如來の御眞意が頂かせて貰へるのである。斯くの如く第十八願の親心を頂くに先き立ちて、茲に此の親が待つて居ることを知らせんとあるが、佛の本願より現はれた。

設ひ我佛を得んに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱せずば正覺を取らじ。

とある第十七の願てある。而して此の願に報ひ現はれて三世十方の諸佛が先づ第一に、斯る遣る瀬無き大悲の親樣が我々を救はんと廣大の願行を起し、十劫以來待つて居て下さると、其の遣る瀬無き親心の程を、十方世界有りと有る有緣の衆生に傳へ知らせて下さる。之が諸佛如來の御方便である。而して其の遣る瀬無き諸佛方便の時到り、殊に日本に於て其の親心を知らせて下さる時節到來して、源空ひじりと日本に現はれ、此の南無阿彌陀佛をお知らせ下されたのてある。之が法然聖人一代の御敎化てある。

大分話が色々になりますが、茲が實に頂き處てある。親鸞聖人が法然聖人一代の念佛の御敎化を如何にお頂きなされたかといふに、今言ふ法然聖人の「選擇本願南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本」の御敎化。此の御敎化を頂いて親鸞聖人は、法然聖人がお知らせ下さる其の南無阿彌陀佛の廣大の名號は、如來より我々に下さる如來廻向の大行である。又其の法然聖人のお知らせ下さる南無阿彌陀佛の名號を聞き、我々が心の夜の明けるは、如來より下さる如來廻向の大信てある。凡て此の南無阿彌陀佛の廣大なお惠みは、皆な如來より下さる廣大の御與へ物てあつて、凡て皆な如來の廻向てある。往相の廻向、還相の廻向、其の往相の廻向には、大行あり、大信ありと示されて、何もかもが皆な遣る瀬無き御本願より與へて下さる如來の廻向てある。といふのが親鸞聖人の淨土眞宗の根本本意となつて居るのてある。

さて之は何を申したかといふに、實は親鸞聖人が『敎行信證』の『行卷』に示された處を申したのてある。御存知の如く『行卷』最初の御文には、

謹て往相廻行を按ずるに大行有り、大信有り。大行といふは則ち無碍光如來のみ名を稱するなり。斯の行は即ち諸の善法を攝し、諸の德本を具せり。極速圓滿す。眞如一實の功德寶海なり。かるが故に大行と名く。然るに斯の行は大悲の願より出てたり。即ち是れ諸佛稱揚の願と名く。復諸佛稱名の願と名く。復諸佛咨嗟の願と名く。亦往相廻向の願と名く可し。亦選擇稱名の願と名く可き也。

何うかといふに、如來が私共に與へ給ふ與へ物の往相の廻向

を按ずるに、大行があり、大信がある。「大行といふは則ち無碍光如來のみ名を稱するなり」て、南無阿彌陀佛々々々々と口に稱ふる此の念佛が如來廻向の大行てある。此の南無阿彌陀佛々々々々と稱ふる念佛には、「諸の善法を攝し、諸の德本を具せり。極速圓滿す。眞如一實の功德寶海なり」て、測り知られぬ廣大の功德、惠みが籠つてある。其の大行の南無阿彌陀佛は何うして頂けるのかといふに、「斯の行は大悲の願より出てたり」て、ひとりでに知れるのては無い。此の南無阿彌陀佛を聞き、稱へる事の出來るは、大悲の願が居て下さるからてある。其の願といふは、即ち第十七の願に、三世十方の諸佛が、南無阿彌陀佛々々々と、此の阿彌陀佛の名を稱へ、十方世界に普く知らせるやうにと、此の廣大の誓ひの願がある。此の願の結果として十方諸佛が十方世界に稱へ知らせて下され、其の廣大のみ佛の御一人として、法然聖人が日本に現はれ、此の念佛を知らせて下されたのてある。故に法然聖人のお示し下さる念佛は、全く如來より直き〳〵お授けの念佛てある。と之が親鸞聖人のお喜びなのてある。

二

さて以上は一寸堅くろしくなりたけれども、親鸞聖人が『行卷』にお示しの骨目を、私が頂く儘に、私が思ふ儘に申上たのてある。いらぬ事言ふ必要も無いやうてありますけれども、一寸思ふと、法然聖人が、「選擇本願南無阿彌陀佛、往生之業念佛爲本」と示された此の選擇本願念佛は、法然聖人は第十八願の事を言はれたのてある。夫を親鸞聖人は『行卷』に於て第十七願の上に引き上げ、十方諸佛稱揚讃歎の願にしてあるは、一寸聞くと親鸞聖人と法然聖人とが違ふやうに思はれる。けれども親鸞聖人が法然聖人の敎えをお頂きなされる處になると、斯くなる處が却つて大に難有さの存する處なのてある。夫れは何うかと言ふに、即ち法然聖人が南無阿彌陀佛々々々と稱へて往生するのてあるぞと、斯くお說き下された法然聖人の第十八願の御敎化を、親鸞聖人が御自身の上にお頂きなさる段になると、即ち直き〳〵佛が日本に來りて、直き〳〵佛より名前を名乘り上げ、我々に知らせて下さる向ふ樣より名乘りのお六字てあると、斯くの如くなつて來るのてある。茲の處に言ふに言へぬ有難い思召があるのてある。

大分話が堅くなりますが、いつも言ふ『歎異鈔』の御敎化ても、

親鸞におきてはだゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずるほかに別の仔細なきなり。

「唯念佛して彌陀に助けられ參らすべし」と、之が法然聖人の仰せなのてある。法然聖人は日本て何をお知らせ下されたのてあるか。日本の有りと有る衆生よ、此の廣大の念佛があるぞ、此の南無阿彌陀佛の念佛は、遣る瀬無き佛が我々に向うての、向ふ樣よりの廣大の御名乘りてあるぞよと、廣大の願より現はれて、此の念佛を御手渡し下されたのが法然聖人の御敎化なのてある。夫れ故親鸞聖人は『行卷』中言南無者の御釋の處に於いて、殊に際立てゝ茲の味ひをお示し下されてある。全體親鸞聖人は『行卷』に於て、此の第十七の諸佛稱揚讃歎の願文をもととして、有りと有る經論釋、苟も佛を讃歎し

て『ある御文ならば、皆な悉く茲にお集めなされてある。必ずしも釋尊の金口、三經の御文のみてなく、龍樹菩薩の『大論』を初めとして、三朝淨土の祖師は無論の事、苟も念佛を勸むる御文ならば、三論の祖師でも律宗の祖師でも、どなたの御文でも皆な茲にお引きなされてあるのである、之れは何てあるか、此の南無阿彌陀佛の六字が、斯くの如く有りと有る所に行き渡つて下さるは、斯くの如く多くの方が、種々無量の方面より、此の大悲の佛の御名乘りを取り次いで下さるからであると、お示し下されたのである。而して其の最後に先き程より言ふ法然聖人の「選擇本願念佛云云」の御文を以て結び、斯の如く有りと有るお方が此の念佛の法門をお勸め下さるは、此の我が造る瀨無き佛の心を普く知らすとの、第十七の願心の御現はれてある、此の廣大のお心がもととなりて、斯くは普く南無阿彌陀佛の到らざる隅はないのであると、知らせて下されたのである。

其處て今の言南無者の釋といふは、有名な善導大師の御文てある。夫れを親鸞聖人は『行卷』中にお引きなされてあるのてある。曰く、

南無と云ふは即ち是れ歸命なり。亦是れ發願廻向の義なり。阿彌陀佛と言ふは即ち是れ其の行なり。斯の義を以ての故に、必ず往生を得。

何うかといふに、南無阿彌陀佛といふは、南無は歸命といふ即ち「すがる」といふ意味である。其の「すがる」といふは「亦是れ發願廻向の義なり」て、此方より佛に向ひて願を發し廻向する意味である。又阿彌陀佛といふは、是れ其の行である。故に南無阿彌陀佛と一聲稱ふる念佛には、南無と如來にすがり、阿彌陀佛と其の行成就する謂はれがある。故に一聲なれども、此の念佛は願行具足の念佛てある。といふのが今の善導大師の御言葉のお心てある。處が親鸞聖人は之をば『行卷』の中に如何にお示し下されてあるかといふに、成程如何にも此方から向ふには違はぬも、其の向ふは目當ての無いのに向ふのては無い。南無は歸命、歸命といふは、命に歸するといふことて、命に歸するとは、本願招喚の勅命に從ふといふ意味てある。即ち南無阿彌陀佛とは佛より南無阿彌陀佛と名乘りかけて下さる本願招喚の勅命てあるぞ。其の勅命の儘が此の南無阿彌陀佛てあるぞと、茲て方角が一轉してるのてある。茲はお互に能く氣をつけさせて貰はねばならぬ。

甚だ通俗な言ひ方てあるけれども、之は青年諸君の爲めに言ふのてありますが、成る程南無阿彌陀佛は歸命てある。歸命は「すがる」て、此方よりすがり信ぜねばならぬのてあると言ふならば、成る程此方よりすがり求むる嚴かなる態度はある。けれども夫れではどうしても眞實の安心は出來ぬのてある。茲にお集まり下さる人、教育の有る無し、年の老若を問はず、皆な間違ふのは茲てある。此方より佛に向ひ、すがり求め、彌々お慈悲を突きとめなければならぬ、と思うて居るのが間違ひなのてある。此方から佛に向ひて、佛の眞實の分るものは一人も無い。設ひお慈悲を喜んて居る者ても、此方から佛を突きとめ、言うて見よと言はれた處て、言へるものては無い。若し此方より分かり攫めるような佛ならば、我々が助けて貰へる佛ては無いのてある。然うては無く、向ふよりすつぱり此方の上にかぶせて下さるが佛の廣大なるお慈悲なのてある。此方より佛に向ひて分る者は一人も無い。此方より分からせようとしては何うしても分からぬ、仕て見やうは無いのてある。其の仕て見やう無き淺間しき者を、向ふから助けるとある廣大の大悲のお心が、盡十方無碍光如來——十方を盡し、世界を蔽はざる無き廣大の如來のお心なのてある。其の造る瀨無きお心て向ふから此方に向ひづめに仕て居て下さる、其の向ふからの勅命によりて、初めて此方が頂かせて貰へ、其の仰せを一念有難うと頂いた時が初めて此方の頭が下る時なのてある。其の造る瀨無き親の仰せが、即ち南無阿彌陀佛の本願招喚の勅命てある。又其の南無阿彌陀佛を「發願廻向の義なり」とあるは、此方より願を起して佛に向ふ廻向の意味ては無い。「發願廻向と言ふは、如來己に發願して衆生の行を廻施したまふの心なり」て、如來の親の方より此の我々を哀れみ、廣大の願を發して、此の私に其の造る瀨無き如來の行を與へて下る。夫れが發願廻向といふ事てあるぞ。故に南無を歸命といふは、歸命は其の佛の廣大なる本願招喚の勅命のことてあり、又發願廻向といふは、其勅命によつて、親の手許てこさえて下された南無阿彌陀佛の六字の着物を、此方へ着よと與へて下さる事てあり。故に南無阿彌陀佛の六字は、凡て我々を救ひ、我々に與へる爲めに、親の手許でこさえて下された御親心の塊りてあるぞと、之が親鸞聖人が法然聖人よりお頂きなされた儘なのてある。他力といふことは此の外に無いのてある。

其處て『行卷』には澤山の御文をお引きなされた最後に、選擇本願念佛集(源空集)に云はく。南無阿彌陀佛往生の業には念佛を本と爲す。又云はく。夫れ速に生死を離れんと欲はゞ、二種の勝法の中、且く聖道門を閣きて選んて淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲はゞ、正雜二行の中、且く諸の雜行を抛てゝ選んて正行に歸すべし。正行を修せんと欲はゞ、正助二業の中、猶ほ助業を傍にして選んて正定を專らにすべし。正定の業とは即ち是れ佛名を稱するなり。稱名は必ず生を得、佛の本願に依るが故に。

是れ丈け『選擇集』の初めの御文をお引きなされて、『選擇集』の御教化は此の外に無い。此の廣大な親ありと名乘り知らせ、衆生は此の名乘りを頂いて助けて貰うのぢやぞよと、之をお知らせ下されたのが法然聖人一代の御教化てあるとお示し下され、次に其の御教化を親鸞聖人御自身が頂いて、

明に知んぬ。是れ凡聖自力の行に非ず、かるが故に不廻向の行と名るなり。大小の聖人重輕の惡人皆な同く齊く、選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし。

とお示し下されてあるのてある。之が又實に有難い御言葉なのてある。茲て肝腎の言葉は不廻向といふ文字てある。不廻向とは、南無阿彌陀佛の六字が斯くの如く、全々佛よりのお與へ物てあると頂いて見れば「明に知んぬ、凡聖自力の行に非ず」て、凡夫にしろ、聖者にしろ、此方より稱へて佛にすがり廻向する自力廻向の念佛ては無い。故に不廻向の行とお示し下されたのてある。茲が實に親鸞聖人が淨土眞宗をお開き下されたかなめ、此の如來廻向とお示し下された此の一つが聖人眞宗の眼目なのてある。此の一つが自力他力の分れ目、

回轉のかなめは此の廻向の一つに在るのである。

度々言ふ事なれども、全體佛敎て廻向といふ本來の意味は何うなのであるか。廻向は我々が善き事を爲し、之を廻らして向ふに向ける、といふ之が本來の意味なのである。能く言ふ「願はくば此の功德を以て普く一切に施し、同じく菩提心を起して安樂國に往生せん」て、自分の善根を廻らして向うに向ける、といふ此の外に本來佛敎て言ふ所の廻向の意味は無い。處が親鸞聖人の淨土眞宗の有難いとこは何うかといふに、抑々『敎行信證』なる親鸞聖人眞宗開闢の根本の聖敎の最初からが

謹んて淨土眞宗を按ずるに、二種の廻向あり。一には往相二には還相なり。往相の廻向に就て眞實の敎行信證有り。て、廻向を以て初まつて居るのてある。眞宗は此の往還二種の廻向、廻向がもとなのてある。而して其の廻向は、從來の如く、此方よりあれも菩提の爲め、是れも自分の爲めと、此方よりあゝこうと廻向する凡聖自力の行ては無く、如來より下さる如來の廻向てあるぞ。如來の選擇本願の造る瀨無き御廻向の南無阿彌陀佛てあるぞ。廣大なる大悲の親樣が、我々一切衆生の爲めに、向ふより佛の心を廻らし、我々に與へて下さる、夫れが廻向といふ事てあるぞと、玆で方角を一轉させてお示し下されたのが、親鸞聖人の御敎化なのてある。『和讃』に

南無阿彌陀佛の廻向の、　恩德廣大不思議にて、
往相廻向の利益には、　還相廻向に廻入せり。

其の如來の造る瀨無き南無阿彌陀佛の御廻向、其の御廻向には、往相の御廻向、還相の御廻向。此の私が此の度び其の廣大な御廻向の一つて極樂に往生させて頂くのが往相の御廻向てあり、又其の極樂往生の上は必ず衆生濟度に出て來られるのが還相の御廻向てある。其の往還二種の廻向とも皆な造る瀨無き佛より下さるのてある。して見れば「凡聖自力の行に非ず」て、此方よりあゝこうとするのては無い。皆如來より此方へ廻向して下さるのてある。有りと有る十方衆生の上に、雨の降る如く、日輪の照す如く、向ふより蔽ひかぶせて下さるのてある。此方より求め催促して頂くお慈悲では無い。「故に不廻向の行と名く」てある。「大小の聖人重輕の惡人、皆な同じく齊しく選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし」——斯くの如き廣大の大悲廻向故に、大乘小乘の聖人も、罪惡深重の惡人も、罪の重輕の區別無く、皆な一樣に選擇大寶海、南無阿彌陀佛の本願一實の功德大寶海に歸して、皆な一樣に聲を揃えて南無阿彌陀佛々々々と廣大の慈悲を頂き、念佛成佛させて貰ふ、之が如來廻向の廣大なお慈悲てあると、玆は實に有難い處なのてあります。

三

何うも我々は此の世の事に就き、例へば自分に緣ある者が生命終らんとしてある事有る時など、何うかして其の者を助け度いなどゝいふ思を起す。又信仰の上よりして、何うかして斯る人々に、此のお慈悲を屆け度いと、信仰上よりあゝも斯うもと思ふ事があるのてある。又國の政治法律などに就きても、何うか此の眞實のお慈悲の上に立つた眞實の政治が行はれ、

佛のお心が普く屆くやうあれがしなど、種々に心を惱ます事なれども、此の人生に居る凡夫の身としては親兄弟を初めとして、幾ら此方が力んだからとて、此方の力て屆くお慈悲では無い。實は自分の力てあゝこうと思うて居るのが、早やいつの間にか如來の廻向を我が手に持替へ、「自分が〳〵」といふ心を起して居るのてある。いつの間にか自分が廻向が出來る積りになつて居るのてある。成る程信心の上からは常行大悲の御利益故、其の思ひの起るは無理も無けれども、『歎異鈔』の上には如何にお示し下されてあるかといふに、

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみはぐゝむなり。しかれどもおもふがごとくたすけとぐることはまてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲をもておもふがごとく、衆生を利益するをいふべきなり。今生にいかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛まうすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべきと云云。

如來の廻向には、先き程より言ふ如く、往還二種の廻向がある。我々此の世て幾ら兎や角思ふても、自分の力てはお慈悲の事すら、思うやうにはゆかぬ。親鸞聖人の『末燈鈔』の御消息の中には、「何某は師にも背き、善知識をも輕ろしめ、同行をもあなづり、甚だよく無い。併しながら之を幾らよく仕度く思うても、凡夫の力としてはよくする事が出來ぬ。さればこそ我等は淨土に參りて後、還相の御廻向を頂いて、自由自在に助ける事の出來る身分として頂いて、夫等の人をも助けるのてある。夫れ迄は夫等の人には慣れ近くな」といふお言葉がある。之は甚だ深き思し召しの存する事と頂かせ貰ふ事てある。又同じく『歎異鈔』の中には、

親鸞は父母孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたることいまださふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれも〳〵この順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有緣を度すべきなり。云々。

我が力にて稱ふる念佛て無いから、設ひ父母孝養の爲にても此の念佛用ゐる譯には行かぬ。然らば何うかといふに、即ち「念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて思ふが如く衆生を利益するをいふべきなり。……しかれば念佛まうすのみぞ、未通りたる大慈悲心にて候ふ可き。」又「いづれも〳〵この順次生に佛になりて助け候べきなり。」てある。此の南無阿彌陀佛一つは、自分が助かるのみならず、此の念佛一つを頂けば、次には人をも助ける事の出來る廣大の思召ある南無阿彌陀佛のお六字てある。斯る廣大の如來御廻向の南無阿彌陀佛、如來のお慈悲と頂いて見れば「大小の聖人重輕の惡人、皆な同じく齊しく選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし」——一切衆生有りと有る者、皆な悉く此の廣大の本願に歸し念佛成佛させて頂けるのてある。故に『行卷』此の文の次には又直ぐに續けて、

是を以て論の註に曰く、彼の安樂國土は、阿彌陀如來の正覺淨華の化生する所に非るは莫し、同一に念佛して別の道無きが故にとのたまへり。

四海有りと有る者、南無阿彌陀佛々々々と、皆な共に同一に念佛して、未來淨土に生れさせて頂ける廣大の南無阿彌陀佛であると、お示し下されたのであります。

猶ほ長くなりますけれども、次には此御文に直ぐ續けて

爾れば眞實の行信を獲る者は、心に歡喜多きが故に、是れを歡喜地と名く。是を初果に喩ることは、初果の聖者尙ほ睡眠懶惰なれども、二十九有に至らず。何に況や十方群生海、斯の行信に歸命すれば、攝取して捨てたまはず、故に阿彌陀佛と名けたてまつる。是れを他力と曰ふ。是れを以て龍樹大士は、即時入必定と曰ひ、曇鸞大師は入正定聚之數と云へり。仰て斯れを憑む可し。專ら斯れを行ず可き也。

先き程より云ふ事が、皆な茲に出て來るのである。少々話が細かくなるけれども、此の眞實の行信、――先き程よりいふ眞實の佛の南無阿彌陀佛の御名乘りを頂き、心の暗晴れ、一念南無阿彌陀佛と信じた者ならば、心に言ふに言へぬ喜びが現はれる。其の有樣が外に言うて見やうが無い故に、初めて光を見た初果の歡喜地の菩薩に喩へる。之を歡喜地の菩薩に喩へる其の譯は何うかと言ふに、初果の歡喜地の菩薩ですら、睡眠懶惰なれども、猶ほ二十九有に至らぬ。如何に況んや十方群生海、此の我々罪深き衆生、此の廣大な仰せを聞き、南無阿彌陀佛を頂いた者なら、必ず攝取して捨てゝ下さらぬ、言ひ換へれば、初果の聖者すら猶ほ捨てられぬ、況んや大悲の佛のお心にすれば、此の罪惡の衆生、此の廣大なお慈悲を頂いた上は、必ず其の者を捨てぬとあるが、佛の大悲のお心なのである。其の廣大の佛なるが故に、此の佛を「阿彌陀佛と名けたてまつる」――其の罪深き者を捨てぬとある廣大のお心の其の儘が南無阿彌陀佛のお姿である。『和讃』には又

十方微塵世界の　念佛の衆生をみそなはし
攝取してすてざれば、　阿彌陀となづけたてまつる。

阿彌陀佛と申すは、此罪深き衆生を、飽迄攝取して捨てゝ下さらぬみ佛なるが故に阿彌陀佛。つまり阿彌陀佛といへば、もう此罪惡の私を攝取して捨てゝ下さらぬ佛樣なのである。其廣大のお慈悲なるが故に「是れを他力といふ」。他力といふは何も六かしきことでは無い。今日の人は此世界日暮しの有樣が直ぐ他力だとか、或は勉強もせず自然にまかせて置く事が他力だとか、或は天地自然の有樣が他力だとか、そんなことを言ふ。そんな事は他力でも何んでもない。此十方世界罪深き衆生を、飽迄攝取して捨てゝ下さらぬみ佛、其の廣大のみ力之が他力なのである。又の御言葉には「他力といふは如來の本願力也」とも御示し下されてある。實に他力といふは如來直接の廣大の御力。其の廣大のお力にて、其の遣る瀨無き御呼び聲の聞えて下された信樂開發の一念に、攝取して捨てゝ下さらぬ。故に是を以て龍樹大士は即時入必定とお示し下さる。もう此の攝取光中の身となれば、彌勒菩薩にも劣らぬ必定の菩薩と仕て下されたのぢやとお知らせ下さるのである。又曇鸞大師は入正定聚之數ともお示し下されてある。「仰いて斯れを憑む可し。專ら斯れを行ず可き也」の御敎化であります。

猶ほ其の次には續けて、

良に知んぬ、德號の慈父ましまさずば、能生の因闕けなむ、光明の悲母ましまさずば、所生の緣乖きなむ、能生因緣和合すべしと雖、信心の業識に非ずば、光明土に到ること無し。眞實信の業識斯れ則ち內因と爲す。光明名の父母斯れ則ち外緣と爲す。內外因緣和合して報土の眞身を得證す。

茲が光明名號の因緣といふ名高い御文である、此の光明の母のお照しで、此の南無阿彌陀佛の父の御名乘りが頂けるのぢやぞと、お示し下されたのである。上來言ふ所の南無阿彌陀佛のお名乘りは、唯のお名乘りでは無い。或は南無阿彌陀佛は唯のお名乘り丈けで、內容が無いと思ふかも知れぬが、此の南無阿彌陀佛が大悲の親樣のお名乘りなる其の義理は何うかといふに、即ち無碍光如來の親樣は南無阿彌陀佛々々々と向ふより此の親の名乘りを聞こえさせて下さると共に、其の廣大の光明は、十方世界を照らし此の廣大のお慈悲に引き入れんと、常に照しづめにして居て下さるのである。之れが光明の母親のお惠みなのである。而して我々此の光明に催うされて、初めて其の名號の聞こえて下さる一念、我々の微かなる罪惡の一人々々の胸中に、初めて信樂開發して信心の業識が生ずる。故に此の大悲の親樣が有り難いと、初めて我々胸中に頂けた一念は、即ち父なる此の南無阿彌陀佛のお名乘りと、母なる私共の心の底迄照らして下さる光明と、此の光明名號の因緣和合して我々が心底に屆いて下された信心ぢやぞとお示し下さるのである。餘り細かく言ふと六かしき如きも、茲は決して六かしき味ひでは無い。大悲の佛は其の廣大の光明で、まだ此の親名乘りが屆かぬか、まだ此の親心が分からぬかと、恰も親が哀れみの心で小供を育てる如く、私共の心を常に育て上げて居て下さる。夫れが佛のお光明なのである。

斯くして此の光明名號のお力で、「茲に南無阿彌陀佛の親が居るぞ、外の事當てにして居ては助からぬぞ、助くるは唯親丈けぢやぞ」とお知らせ下さる。其の遣る瀨無きお心が屆いて下されて今迄口に念佛して居ても口先き念佛、又光明といふも何か外に變つた事でも有るやうに思つて居た者が、彌々其の一念の時至りて、斯くの如き廣大の親樣であつたが、斯くの如き廣大のお名乘りが南無阿彌陀佛の六字であつだか、今迄此の佛のお心を知らなんだ爲め、あゝ斯うの此の世で思うて居たのであるが、實に申譯が無い、あゝ是れ程迄に今日迄呼びづめにし、待ち兼ねて居て下されし親樣なりしかと南無阿彌陀佛々々々と、頂かせて貰ふ。其の一念にはや其の攝取不捨の大光明中に攝取せられ、口に念佛の出づる時は、はや既に此の御恩を喜ばせて貰ふ感謝の稱名、斯くして八萬四千の光明中に攝め取られ、最早や出られぬ身の上と仕て下さるのである。さて斯く頂かせて貰ふと、此の度びは此の名號の父と光明の母が、此の者を喜び護り、其の信心をもり立てる慈父母となつて下さるのである。我々が此の喜びの上より南無阿彌陀佛々々々と念佛するは、恰も慈母の乳を一口〳〵頂くと同じである。又其の光明は常に此の者を照らし下され、『和讃』に

煩惱にまなこさへられて、　攝取の光明みざれども、

大悲ものうきことなくて、　つねに吾が身をてらすなり。

常に照しづめにして下さるのである。斯くして、其の頂く所の信心と、遣る瀬無き光明名號と、此の二者一體となりて、喜ばせて貰ふがお慈悲頂いた樣である。而して遂に此の內外因緣和合して報土の眞身を得證させて下さるのである。親鸞聖人が如來廻向とお示し下されたは即ち茲である。斯く廣大の本願を屆け、南無阿彌陀佛の名乘りを聽かせ、我等が心に信を起さしめ、其の者を淨土に生れしめ、又再び衆生濟度をさすると、之を往還二種の廻向とお示し下されたのであります。

さて斯く頂くと、我々が極樂に往生するは、極樂往生が目當て往生するのでは無い。此の廣大の信を頂けば、遣る瀬無き願力の結果として、自然に極樂に生れさせて下さるのである。『和讃』には、

信は願より生ずれば、　念佛成佛自然なり、
自然はすなはち報土なり、　證大涅槃うたがはず。

自然に極樂に生れるのである。之が他力眞實の信の有難き所である。又其の淨土に參らせて貰へば、又自然に衆生濟度にも出させて貰へるのである。其處で『行卷』今の御文には直ぐ續けて、

故に宗師は、光明名號を以て十方を攝化し、但信心を求念せしむと言へり。又念佛成佛是眞宗と云へり。又眞宗遇ひ叵しと言へり。知る可し。

念佛成佛是眞宗といふ一句が肝心である。念佛成佛是眞宗とは斯く南無阿彌陀佛々々々と稱へて、遣る瀬無き思召を頂けば、自然に往生し成佛する、是が眞宗であるとの御言葉である。先き程より言ふ敎行信證といふ事も、此の念佛成佛是眞宗の一句に收まるのである。『歎異鈔』の十二章には

他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎は、本願を信じ、念佛をまうさば、佛になる。そのほかなにの學問かは往生の要なるべきや。云云。

「他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎」とは、即ち『敎行信證』である。『敎行信證』は御承知の如く、題號からが『顯淨土眞實敎行證文類』とあつて、皆な他力淨土眞實の宗を顯せる聖敎をお集め下されたものである。其の他力眞實の旨を顯かせる『敎行信證』は、「本願を信じ念佛を申せば佛になる」――――是れが「念佛成佛是眞宗」の一句である。此の「本願を信じ念信を申せば佛になる」といふ此の一句をお知らせ下さる外に、他力本願眞實の聖敎は無い。念佛成佛是眞宗――――即ち「本願を信じ、念佛を申せば佛に成る」といふ、此の他力眞實の宗をおあかし下された宗旨が、眞宗であり。之をお知らせ下された聖敎が『敎行信證』である。親鸞聖人五十二歲の時淨土眞宗根本の聖敎としてお作り下された『敎行信證』の趣きは、要するに此の一言の外に無い。此の「念佛成佛是眞宗」即ち「本願を信じ念佛を申せば佛に成る」といふ此の一句を叮嚀に書き延べて下されたものが即ち『敎行信證』の御敎化なのである。

さて斯く頂いて來ると、此の信心の事を我々六かしく思うて居るのが大間違ひ、法然聖人のお示し下さる所も「本願を信じ、念佛を申せば佛に成る」といふ、茲一つなのである。去りながら茲で取り落せぬは、初めの「本願を信じ」の一句で

ある。法然聖人の三百餘人のお弟子中、聖人の敎を聞いて念佛せぬ人は一人も無い。けれども此の念佛が佛より名乘つて下さる念佛であると本願を信じ、稱へた人は少なかつたのである、我が親鸞聖人は夫を何處でお頂きなされたか。即ち常に言ふ「親鸞に於きては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」の御一句である。此の信に出て來る所が有難いのである。

猶ほ茲で話が少し六かしくなりますけれども先き程も一寸申したのでありますが、此の法然聖人の『選擇集』の御敎化と、親鸞聖人の『敎行信證』の御敎化とは、一寸見ると大に違ふように見えるが、實は少しも違つては居ぬのである。御存知の如く『選擇集』は初めに南無阿彌陀佛の一つと言ひ、念佛往生と示し、後には『念佛の行者三心を具す可きの文』と言つて、念佛には此の三心の信心がなければならぬと謂ひ、

生死の家には疑ひを以て所止と爲し、涅槃の城には信を以て能入と爲す。

と示して、涅槃に至るは唯信の一つであるぞ、此の信でなければ南無阿彌陀佛は頂けぬぞ、南無阿彌陀佛は唯口先きで稱ふる念佛では無い、心に頂いた此の信心より來る念佛であるぞとお示し下されたが『選擇集』の御敎化である。而して其の御敎化の儘が『敎行信證』に現はれて

謹て往相の廻向を按ずるに大信あり。大信心とは則ち是れ長生不死の神方、忻淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海也。云云。

此の信心となつて來たのである。故に法然聖人の念佛と親鸞聖人の信心とは別物では無い、南無阿彌陀佛々々々と念佛稱へつゝ喜ばせて貰ふのが信心である。一寸聞くと法然聖人の『選擇集』は念佛がもとであり、親鸞聖人の『敎行信證』は信心がもとであると思へるけれども、法然聖人のお示し下さる念佛は此の信心の念佛、又親鸞聖人の『敎行信證』にしても、先づ初めに念佛と行を書き、次に信を置き、矢張り親鸞聖人も念佛を先きにし、信を后にお示し下されてあるのである。夫は何か、此の念佛は佛より御名乘りの念佛であるぞよ、此の念佛の御名乘りで此の信心が頂けるのであるぞよ、とお示し下されたのである。さて斯く段々と頂く時は、此の南無阿彌陀佛の親心を身を以てお示し下されたのが親鸞聖人法然聖人の御一代であります。

四

猶ほ今日は法然聖人の七百年の昔を思出させて貰ふに就け、親鸞聖人が法然聖人の御往生の事を『西方指南鈔』の中にお記しなされてある。今日は法然聖人御往生の昔を思はせて貰ひ、其の御文を拜讀させて貰ほうと思ひます。其の御文を拜讀すると、親鸞聖人が『和讃』の中にお示し下された法然聖人御往生の時の事柄が皆な其の中に在るのである。今は御流罪の處からを拜讀させて貰ひます。曰く。

……南北の碩德顯密の法燈、或は我が宗を謗すと號し、或は聖道を嫉むと稱す。事を左右に寄せて咎を求む。縱横

に於て動もすれば天聽を驚かし、門徒に諷諫するの間、不慮の外に忽ちに勅勘を蒙りて、流刑に行はれ了ぬ、然りと雖程無く歸洛し了んぬ。權中納言藤原の朝臣光親、奉行と爲つて、勅免の異を下さる。同じき日未の時、目を擧げ、掌を合はせ、東方より西方を見る事五六度。弟子奇しみて問うて云く。佛來迎したまふ歟と。聖人答て云く、然か也。二十三四日に紫雲罷まず、彌々廣く大きに聳く。西山に炭を賣るの老翁、薪を荷ふ樵夫、大小老若之を見る。二十五日午の時ばかりに、行儀に違はず、念佛の聲漸く弱ばく、見佛の眼眠るが如し。紫雲空に聳き、遠近の人々來り集る。異香室に薫んず。見聞の諸人仰いて信ず。臨終已に到り、慈覺大師の九條の袈裟、之を懸けて西方に向うて唱へて云はく。一一光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と云云。停午の正中也。三春何れの節ぞ哉。釋尊滅を唱へたまひ、聖人滅を唱へたまふ。彼れは二月中旬五日なり、此は正月下旬五日なり。八旬何れの歳ぞ哉、釋尊滅を唱へたまひ、聖人滅を唱へたまふ。彼も八旬なり、此も八旬なり。園城寺の長吏法務大僧正公胤、法事の爲めに之を唱導するの時、其の夜夢に告げて云く。源空教益の爲に公胤能く法を說く、感即ち盡す可らず、臨終先づ迎攝せん、源空本地の身は大勢至菩薩衆生教化の故に此の界に來る度々と。此の故に勢至來見して大師聖人と名く。このゆへに勢至を讃じて言はく、無邊光知惠光を以て、普く一切を照らすと。故に聖人を嘆じて知惠第一と稱す。碩德の用を以て七道を潤ほす故也。彌陀勢至を動かして濟度の使と爲たまへり。善導聖人を遣はして順逆の緣を整へたまふ。定めて知んぬ、十方三世無央敎界の有情無情、和尙世に興ずるに遇うて、初めて五乘濟入の道を悟る。三界虛空四禪八定天王天象、聖人の誕生に依つて、忝けなくも五衰退後の苦を拔く。何に況んや末代惡世の衆生、彌陀稱名の一行に依つて、悉く往生の素懷を遂げん。源空聖人傳說興行の故也。仍て之に來れることは、之を弘通し勸めんが爲め也。

南無釋迦牟尼佛。　南無阿彌陀如來。
南無觀世音菩薩。　南無大勢至菩薩。

猶ほ御存知の如く、『敎行信證』の畢には、

皇帝(佐渡院諱守成)聖代建曆辛未の歳、子月中旬第七日、勅免を蒙つて入洛の已後、空、洛陽東山の西の麓の鳥部野の北の邊り大谷に居したまひ、同じき二年壬申寅月の下旬第五日午の時入滅したまふ。奇瑞稱計す可らず、別傳に見えたり。

とある。其の別傳と言ふのが、即ち此の『西方指南鈔』に、法然聖人臨終行儀として、聖人御臨來の御樣子を丁寧に御示し下されてあるのである。今其の一部文を拜讀させて貰ひます。

法然聖人臨終行儀、

建曆元年十一月十七日、藤原中納言光親卿のうけたまはりにて、院宣によりて十一月二十日戌の時に、聖人みやこへかへり入りたまひて、東山大谷といふところにすみ侍るに、同じき二年正月二日より、老病の上に、ひごろの不食おほかた、この二三年のほどおほれて、よろづのものわすれなどせられけるほどに、ことしよりは耳もきゝ、こゝろもあ

きらかにして、としごろならひおきたまひける法文を、時々おもひいだして、弟子どもにむかひて談義したまひけり。またこの十餘年は耳おぼろにして、さゝやき事をばきゝたまはず侍りけるも、ことしよりは昔のやうにきゝたまひて、例の人のごとし。世間のことはわすれたまひけれども、つねは往生の事をかたりて念佛したまふ。またあるひは高聲にとなふること一時、あるひはまた夜のほど、おのづからねふりたまひけるも、舌口はうごきて、佛の御名をとなへたまふこと、小聲聞え待りけり。ある時は舌口ばかりうごきて、その聲はきこえぬこともつねに待りけり。されば口ばかりうごきたまひけることをば、よの人みなしりて、念佛を耳にきゝける人、こと〳〵くきとくのおもひをなし侍りけり。また同き正月三日戌の時ばかりに、聖人看病の弟子どもにつげてのたまはく。われはもと天竺にありて、聲聞僧にまじはりて、頭陀を行せしもの、この日本にきたりて、天臺宗に入りて、またこの念佛の法門にあえりとのたまひけり。その時看病の人の中にひとりの僧ありて、とひたてまつりて申すやう。極樂へは往生したまふべしやと申しければ、答へてのたまはく。われはもと極樂にありしみなれば、さこそはあらむずらめとのたまひけり。又同じき正月十一日辰時ばかりに、聖人おきぬて合掌して、高聲念佛したまひけるを、聞く人みななみだをながして、これは臨終の時かとあやしみけるに、聖人看病の人につげてのたまはく、高聲に念佛すべしと侍りければ、人々同音に高聲念佛しけるに、そのあひだ聖人ひとり唱へてのたまはく。阿彌陀佛を恭敎供養したてまつり、名號をとなえむもの、ひとりもむなしき事なしとのたまひて、さま〳〵に阿彌陀佛の功德をほめたてまつりたまひけるを、人々高聲をとゞめてきゝ侍りけるに、なほその中に一人たかくとなへければ、聖人いましめてのたまふやう。しばらく高聲をとゞむべし、かやうのことは、時おりにしたがふべきなりとのたまひて、うるはしくゐて合掌して、阿彌陀佛のおはしますを、この佛を供養したてまつれ、たゞいまはおぼえず、供養の文やある、えさせよと、たび〳〵のたまひけり。またある時弟子ともにかたりてのたまはく、觀音勢至菩薩聖衆まへに現じたまふをば、なむたちおがみたてまつるかとのたまふに、弟子等えみたてまつらずと申しけり。またそのの ち臨終のれうにとて、三尺の彌陀の像をすえたてまつりて、弟子等申すやう。この御佛をおがみまいらせたまふべしと申し侍りければ、聖人のたまはく、この佛のほかに、また佛おはしますかとて、ゆびをもてむなしきところをさしたまひけり。案内をしらぬ人はこの事をこゝろへず侍り。しかるあひだいさゝか由緒をしるし侍るなり。凡この十餘年より、念佛の功つもりて、極樂のありさまをみたてまつり、佛菩薩の御すがたをつねにみまいらせたまひけり。しかりといへども御意ばかりにして、人にかたりたまはず侍るあひだ、いきたまへるほどは、よの人ゆめ〳〵しり侍らず。おほかた眞身の佛を、みたてまつりたまひけること、つねにぞ侍る。また御弟子ども、臨終のれうの佛の御手に、五色のいとをかけて、このよしを申し侍りければ、聖人これ

ばおほやうのことのいはれそ、かならずしもさるべからずとぞのたまひける。又同じき二十日己の時に、大谷の房上にあたりて、あやしき雲、西東へとおくたなびきて侍る中に、ながさ五六丈ばかりして、その中にまろなるかたちありけり。そのいろ五色にして、まことにいろあざやかにして光りありけり。たとへば繪像の佛の圓光のごとくに侍りけりみちをすぎゆく人々、あまたところにてみ、あやしみておがみ侍りけり。

又同じき日午の時ばかりに、ある御弟子申していふやう。この上に紫雲たなびけり、聖人の往生の時ちかづかせたまひて侍べるかと申しければ、聖人のたまはく、あはれなる事かなと、たび〳〵のたまひて、これは一切衆生のためにと、しめしてすなわち誦してのたまはく、光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と、三返となへたまひけり。またそのひつじの時ばかりに、聖人ことに眼をひらきて、しばらくそらをみあげてすこしもめをまじろかず、西方へみおくりたまふこと、五六度したまひけり。ものをみおくるにぞにたりける。人みなあやしみてたゞ事にはあらず、これ證相の現じて、聖衆のきたりたまふかとあやしみけれども、よの人はなにともこゝろえず待りけり。おほよそ聖人老病日かさなりて、ものをくはずしてひさしうなりたまひけるあひだ、いろかたちもおとろえて、よはくなりたまふがゆへに、めをほそめてひろくみたまはぬに、たゞいまやゝひさしくあおぎて、あながちにひらきたまふこと、あやしきことなりといひてのち、ほどなくかほのいろもにわかに變じて、死相たちまちに現じたまふ時、御弟子どもこれは臨終がとうたがひて、おどろきさわぐほどに、れいのこと〳〵なりたまひぬ。あやしくもけう紫雲の瑞相ありつる上に、かた〳〵かやう〳〵のことゞもあるよと、御弟子たち申待りけり。

又同じき二十三日にも、紫雲たなびきて待るよし、ほのかにきこえけるに、同じ二十五日むまの時に、また紫雲とほきにたなびきて、西の山の水の尾のみねにみえわたりけるを樵夫ども十餘人ばかりみたてまつりけるが、その中に一人まいりて、このよしくはしく申しければ、かのまさしき臨終の午の時にぞあたりける。またうづまさにまいりて下向しけるあまも、この紫雲をばおがみ、いそぎまいりてつげ申し待りける。すべて聖人念佛のつとめおこたらずおはしける上に、正月二十三日より二十五日にいたるまで、三箇日のあひだ、ことにつねよりもつよく、高聲の念佛を申したまひける事、或は一時、或は半時ばかりなどしたまひけるあひだ、人みなおどろきさわぎ待る。かやうにて二三度になりけり。またおなじき二十四日酉の時より、二十五日の時まで、聖人高聲の念佛をひまなく申したまひければ、弟子ども番々にかはりて、一時に五六人ばかりこえをたすけ申しけり。すでに午の時にいたりて念佛したまひけるこゑ、すこしひきくなりにけり。さりながら時々又高聲の念佛まじはりてきこえ待りけり。これをきゝて房のにわのまいにあつまりきたりたる結緣のともがらかずをしらず。聖人ひごろつたへもちたまひたりける、慈覺大師の九條の袈裟をかけて、まくらをきたに、おもてを西にしてふしながら、

佛號をとなへてねぶるがごとくして、正月二十五日午の時のなからばかりに往生したまひけり。そのゝちよろづの人々ききおひあつまりて、おがみ申すことかぎりなし。(已上)

猶ほ此の後に、夥多の人々が聖人の御事を夢に見た事などが色々記るされてある。之確かに『教行信証』の別傳云云の御文と符合するのであります。猶ほ已上を、和讃』に比べて頂くと、

源空光明はなたしめ、　門徒につねにみせしめき、
賢哲愚夫もえらばれず、　豪貴鄙賤もへだてなし。
命終その期ちかづきて、　本師源空のたまはく、
往生みたびになりぬるに、　このたびことにとげやすし。
源空みづからのたまはく、　靈山會上にありしとき、
娑婆間僧にまじはりて、　頭陀を行じて化度せしむ。
願散片州に誕生して、　念佛宗をひろめしむ、
衆生化度のためにとて、　この土にたび〳〵きたらしむ。
阿彌陀如來化してこそ、　本師源空としめしけれ、
化緣すでにつきぬれば、　淨土にかへりたまひにき。
本師源空つぉはりには、　光明紫雲のごとくなり、
音樂哀婉雅亮にて、　異香みぎりに映方す。
道俗男女預參ー、　卿上雲容群集す。
頭北面西右脇にて、　如來涅槃の儀をまもる。
本師源空命終時、　建曆第二壬申歳、
初春下旬第五日、　淨土に還歸せしめけり。

『和讃』に全く能く合ふのである。之れ正しく法然聖人御往生の樣を、親鸞聖人が直き〳〵書き遺して下されたものと喜ばせて頂く次第であります。(一月二十九日)

告白

五六日の中に死ぬる

金津香藏

私は不幸なる病氣に侵されて、非常に煩悶を致し、毎日苦しんで居りましたが、只今は近角先生の御陰げによつて、如來樣の深い御慈悲を戴き、かへつて病氣に罹つのが幸福と成つて、非常に喜ばして戴き、今は大安心を致して、日夜報謝の念佛を稱へて喜こんで居る者で有ります。私は九段佛教倶樂部の當年十七歳になる小僧で有りますが、過る一月七日の第一土曜日に、近角先生か第二求道會の土曜講話に御出てに成つた時、先生から御前さんは、大變如來樣の御慈悲を戴き、喜こんで居るから、どんなでも宜しいから、告白を書いて、雜誌に載せたら、よかろーとの、御言葉で御座いました、私も大變嬉しく思ひましたが、こんな學問も何にも無い、無能無智識の小僧が、學問も有り智識の有る方々の御書きに成る告白に對しても、誠に濟みませんし、又大切な御事斗り書く雜誌を無駄に費すのも、實に勿體無い事を種々考へましたが父がいや〳〵そーては無い、此の告白を書くのは御前が書くのでない、如來樣の御智識で書かして頂くので有るから、決して心配せずに書くがよいと云つて下さいましたから、私はそんなら文章はどんなでも、たとひ字は假名ばかりでも、只

だ私が如來樣から頂いた、御信心の動機及び御信心を頂く前はどんな有樣て有つたか、其樣子を皆樣の前に告白したいと思つて書いたのて有りますから、皆樣何卒其の御積りて御讀み下さる樣御願ひ申します。

偖而私は僧侶の家に生れた者て有りますから、幼さない時分から、父と共に御佛前にすはり、朝夕の御勤めを致して、末だ小學校に上らない前には、父が正信偈を上げるのを出來無い乍ら、眞似をして、大きな聲て一所に上げました。其時分私の心持は、どんなて有つたかと云いますと、只だ如來樣の前て御經を上げると、如來樣は可愛がつて下さるとか、好きなものを下さるとか、又は惡い事をすると地獄に行き、鬼にせめられてこはいから、或は善い事をすると極樂に行つて、如來樣から可愛がられ、何んても好きな物を頂き、面白く遊ぶ事が出來るとかと云樣な考へを持つて、朝夕の御勤めは必ず致さなければならない事と思つて居りました、それから追々と年を重ね、小學校の尋常三年生位いの時分からそろ〳〵正信偈、御和讃及び阿彌陀經を習ひ始めましたが、學校て友達から種々な惡口を聞いたり、又自分で云つてみたり、いやな事を聞いたり見たりして、だんだんと、いたずらが面白く、惡い方惡い方へと行く樣に成つて、ちつとも善い事をしませんでした、すると今度は地獄だの極樂だの有るものかと思つて、もー朝夕の御勤めをするのも、父の代理に近所へ御經を上げに行くのも、いやて〳〵たまりませんでした、其時私は、如來樣は何ぜ私をこんな線香臭い説教所等へ生れさして呉れたのだろうー、何ぜもつと、よい商人の家か軍人の家に生れさして呉れなかつたのだろーと、大變如來樣を恨みました、而して時々説教だの講話だのが有る時は、毎も〳〵外へ飛び出し、遊びにふけつて居りました、而して朝夕の御經や、父の代理に近所へ御經を上げに行くのは、只だ形式斗りて實にいやて〳〵、仕方無く勤めて居りました、其れ故私は毎も〳〵學校から歸ると直ぐ、用事を云付けられ無い内遊びに出て仕舞いました、實に私は其頃如來樣や、兩親を困らせたのは、どれ程だか計り知れません、此云ふ有樣て高等小學校を卒業したのは、恰ど十四歳て有りました、其時末だ小學校を卒業する前、一月の五日平生非常に私を可愛がつて下すつた、大切な祖母樣が腦溢血とかの病氣て、布とんの上に倒れたつきり、歸らぬ旅路に行かれました、私は其時に成つて、さー大變て有ると、それからは御念佛を申し、御經を上げて、大變有難そーに過ごしまして、時々は御説教及び講話等を聞く樣に成りました、而して人間は何時か一度は死なゝければならない事のだ、自分も何時か一度は死なゝければならない事のだと思ふと、何と無く死ぬ事が恐ろしく成つてきましたが、其れも束の間、何時か追々と忘れて、其の内に小學校を卒業するやら、中學校へ入學する準備等、種々な事て氣がまぎれて、大切な祖母樣が亡く成つた事や、死ぬ事を恐れた事などは皆んな忘れて仕舞いました。

それから其年の四月に、芝高輪の中學校へ入學致しまして、一生懸命に勉強を致し、第一學期の試驗も無事に濟みましたので、まー是てよいと思つて安心をして居りますと、身體の工合が少し惡いので、醫者に診察をして貰ひますと、醫者が

云いますには、肺が少々惡いから氣を附けて呉れとの事て有りました、其時私は實に驚きました、肺病に掛つたら、罪人が死刑の宣告を受けたも同樣に、二三年の内に死ぬのだと、私は或人から何時か聞いた事が有りますから、醫者が今自分に、御前さんは肺が少し惡いから氣を附けろと云はれた時は、餘り驚ろいて、頭がぐら〳〵して後ろに倒れそーて有りました、私は一體、神經が過敏の性ですから、それを聞く成り、最早や死人の樣に自分は考へて仕舞いました、今迄私は中學校へ上つたなら一生懸命、勉強をして立派に卒業をし、高等學校から大學校に上がつて、堂々たる學者になつて、兩親を養ひ、名譽財産を得て、立派に遺つて行く積りて有りました、そして種々なる處の空想を畫いて、日暮しを致して居りましたのが、今此處て死刑の宣告を受けたも同樣と成つては、もー名譽も財産も學者に成る事も、其んな空想はめちや〳〵に成つて、其んな空想どころか、今二三年の内に自分は死なゝければなら無いのだと思へば、實に死ぬ事が眞に恐ろしく成つて來ました。それから今度は前とは違つて、何んとか御信心を頂き、安心を致たさうと思ふて、自分から進んて、御説教だの講話だのを聞く樣に成りましたが、どうして、幾ら聞いても〳〵聞けば聞く程、尚煩悶苦痛を增す斗りて、少しも御信心を頂く事が出來ませんでした、其れも其の筈、今考へますと、非常に間違つて居つた事と深く懺悔を致します、なか〳〵自分て御信心を得よー等と、未だこんな自力根生を持つて居る間は到底頂ける物ては有りません、左樣な有樣て、毎日煩悶の上に煩悶を重ねて、苦しんで居りました。

やがて其の年も過ぎ翌年十五の年の七月、父が云いますのに、御前もいつ迄も東京の樣な空氣の惡い處に居ては、だんだんと、病氣も進んて來る斗りだから、何處か空氣のよい處へ、轉地療養をしては、どうだとの御言葉て有りましたから、私も有難く御言葉にしたがい、其月の十七日に、千葉の銚子海岸へ、轉地療養に參る事と致しました、偖而行李の中へは、着物だの、其他總ての日用品を入れて、其中へ近角先生の求道、又香樹院語錄、及び種々有難い、御信心の話し等が書いて有る、雜誌を數冊行李の中へ一所に入れ、充分仕度を整へて、兩國停車場から汽車に乘り、無事に銚子の海岸へ到着致しました、それからは、ひたすら養生を專一に、日暮しを致して居りますと、追々少しづゝは快方に成つて、自分ても喜こんて居りましたが、如何にも心の安心が出來ませんので、時々は有難い雜誌を開いて、讀んて見ますと、其の時は、大變有難く感じ、時としては涙がこぼれる程、嗚呼有難い、成程そーだと思ひまして、私も漸く是て御信心を得たなどと、喜こんて居りましたが、其れは僞信心て、有難いと思ふのは、其の雜誌を讀んて居る時だけて、一時間と過ぎ無い内に、忘れて仕舞いますから、是ては為ら無い、どうかして、眞の御信心を得て、安心をしたいと、又自力根生を起しては、讀み直して見ますが、やはり同じ事て、其の時だけ有難いと思ふても直ぐ又忘れて仕舞いますので、どうしても安心が出來ませんてした、もと〳〵私は僧侶の家に生れたので有りますから自分の罪の深い位いの事は始終説教だの講話などて、聽いて承知をして居りますがどーも極惡深里の私とか、極惡最下の私

とかと說教だの講話などて云はれたり又雜誌などに、此の樣な事が書いて有りますと、疑ひを起して、幾ら私が惡い人間ても、人の物を取つたり、又は人を傷けたり、殺したりする樣な、其んな惡い事は、一度もした覺へは無い、それは、私とても、人を謗しつたり、虛言をついたり、又は腹を立てたり、惡口を云つたり、する樣な事はする、けれども此樣な事は誰でもするては有りませんか、決して私し斗りては無いのに如來樣は何ぜ私を世界中で一番惡い者の樣に、極惡深重だの、極惡最下だのと、私を惡く云ふので有るかと非常に如來樣を疑ひました、眞に御信心を頂け無い前は、自分て自分の心を疑り、又は如來樣を疑り其だしきは如來樣は自分の病氣の苦痛を何ぜ早く直して下さらないのだろーと、斯くの如く如來樣を疑つたり恨んだりするとは實に勿體無いとも何んとも、申譯けが有りません。此樣な疑りを起して、煩悶をするかと思へば又或時は如來樣に此樣な疑りを起して御困らせ申したら、如來樣は私を憎くんで助けて下さら無いだろーか、地獄に落ちや仕無いだろーかと、餘計な心配をして苦しんて居りました。

それから又私も幼い時分に、父から宗祖親鸞聖人の御命日と、先祖の命日には、必ず精進をして、惡い事を仕無い樣に、注意しなければ無らないと、始終申されて居りましたから、必ず親鸞聖人の御命日と、先祖の命日には、精進をして、謹しんて居りました、其れ故私が、銚子に居りました時もやはり、聖人の御命日と先祖の命日だけは、何つも〳〵精進を致して、謹しんて居りましたが、其れは表べ斗りて、心から聖人に對しても、先祖に對しても、精進を致して居るのては無く、只だ自分の心が、なまぐさものを食べず、精進を仕無いと、何んと無く濟まないので、仕方無く、精進をするので有りました、其れ故人が魚などを食べて居りますと、私の心は、もー其れが食べたくて〳〵、仕樣が有りませんが、口て我慢をして居りますと、人は私の事を、さすがに僧侶の家に生れた小僧さんだけ有つて、慳心に豪らい者だ、などと譽めますから、自分は如何にも豪らい者の樣な氣がして、非常にうれしいので有りました、誠に考へれば考へる程、淺間しい、勿體無い小僧で有ります、自分の心から、眞に有難いと思つて、嗚呼今日は宗祖聖人の御命日て有る、或は先祖の命日て有るから、謹しんて精進をして、少しても、餘計に報謝の念佛を稱へさして頂き、喜び〳〵、御命日の日を滿足に、過ごさして頂く樣なれば、こんな結構な事は有りませんけれど、未だ其時分の、私の心は、如來樣の、遺る瀨無い、御本願の御慈悲が、眞に頂けて居ないもので有りましたから、前の樣な有樣て、只だ自分の心に、何んと無く濟ま無いとか、人に譽められてうれしいからと、云ふ樣な事て、少しも有難いと思つて致したのては、有りません、こんな罪を造くつて居乍ら、自分は惡い人間て無い樣な顏をして、如來樣を疑ぐつたり、恨らんだりするとは、實に私は罪惡の塊りて有ります。

此樣な有樣で、毎日種々な事を思ふては、煩悶をして日送りを致して居りましたが、私の病氣も始めの內は滋養物を食べ、新鮮な空氣を吸ひ、運動をしたので、少しは快方に成りましたが、追々寒く成つて、翌年の一月二月頃には、非常に寒いので、運動も出來ず、其れが爲め、風邪を引きましたの

が元と成つて、身體の工合も惡く、益々病氣も進む許て有りましたから、仕方無く四月に東京へ歸りました。東京へ歸へつてから、間も無く身體の工合が大變惡いので床につき、苦しんて居りましたが、父が時々私の枕元に來ては、種々と有難い、如來樣の御慈悲の事について、親切に御話しをして下さいました、而して毎も〳〵私に、御前も僧侶の家に生れたからには、どうぞ御信心を頂いて、安心をして下さい、御信心を頂けば、若し御前の病氣が重く成つて死んても、此度は結構な、極樂の御淨土に參る事が出來るから、早く御信心を頂いて、よく報謝の稱名を稱へて、喜こんて呉れよと、申されますと、私は如何にも悲しく成つて、何んだか自分は、今にも死ぬ樣な氣がして、父が親切に御話しをして下さる度に、實に厭やな心持ちがして、仕樣が有りませんてした、どうかもう其んな事を言つて下さら無ければよいと、心の中て思つて居りましたが、父の前ては如何にも、私は御信心頂いて居る樣な顏をして、空念佛を申し乍ら、御父さん實に有難とう御座います、私も不幸にして、御父さんや御母さんを、御養ひ申す事も出來ず、誠に申譯けが有りませんが、若し私の病氣が重く成つて、死にましたなら、私は極樂淨土に參いつて、佛樣と成り、眞ぐ御父樣や御母樣を還相廻向に參りますから、どうぞ安心をして下さいなどと、大層も無い事を申して、如來樣や兩親をあざむいて居りましたが、未だ眞に、如來樣の遺る瀨無い慈悲が、わから無い樣な小僧が、御信心が頂け無いの、如來樣は何ぜ私を何時迄も苦しめ、救つて下さら無いのかなどと、種々な、疑りを起しては、如來樣を御困らせ申して居る樣な、こんな罪の深い小僧が、死んだら、極樂の御淨土に參り、佛樣と成つて、還相廻向に來るなどとは、どうして〳〵、出來る處のさはぎては有りません、こんな圖太い、虛つき小僧は、云はずと知れた事、無間地獄へ眞倒かさまて有ります、それから父が枕元を離れて仕舞ふと、直ぐ又煩悶を仕始めて、死んだら私は、地獄へ落ちや仕無いだらうか、死んだ先はどんな有樣て有るだろうか、如來樣は私の樣な者ても、救くつて下さるだろうかと、種々つまら無い事を、床の中て考へて、日送りを致して居りました。

すると八月の二十日頃になると、益々病も進んて、來る斗りて有りました、すると醫者が、今月一杯は、持ちませんから氣を附けてくれと、影て父に申しましたのが、私の耳にはいりました、私は其れを聞く成り、嗚呼實に、今度と云ふ今度は眞に絕體絕命て有る、如何に最早や、何んと云つて、さはいだからとても、何んとも仕樣が有りません、偖而私は、今迄幾ら、死なねばなら無いのだと思つても、人から、何に肺病は、養生がよければ、全快仕無い事は無いなどと、云はれると、未だ自分でも、一生懸命、養生をすれば、直るだろうと、云ふ考へは有りましたから、多少の希望を持つて居りました、而して若し私が全快したら、學問をやめて、商人にてもならうと、思つて居りました、實に私は當になら無い、自分の心、及び身體を、當にして、未だ此樣な考へを持つて居りましたので有りますが、今醫者から、五六日の內に死ぬと云はれた時の私の心は如何て有つたかと云いますと、實に胸は張りさける樣て、よく世間て萬事休すとは、此の時の事を

申したので有りましよう、而して私は、もう是れは駄目だ、此一呼吸〳〵が、死に近づいて行くのかと思つたら、居ても起つても居られ無い程て有りました、私の御信心を頂かして貰ふたのは、實に此の時て有りました。

私はもう此の時斗りは、眞に如來樣の、御慈悲の如何にも深い事を、染々と、頂く事が出來ました、實に今と成つては、阿彌陀樣の遣る瀨無い、御本願の御慈悲より外に、御すがり申すより仕樣が無いと、つく〳〵、有難く感じさして頂きました、嗚呼私は、今と云ふ今迄は、いくら死なねば、ならぬと思つても、未だ眞に死ぬと云ふ事が、實際に、わからなかつた物て有りますから、多少の希望も持つて居りましたが、かく迄深い、如來樣の御慈悲とは、氣が附きません故、只だ、御信心が頂け無いの、安心が出來無いのと、種々な、自力根生を思ひ起しては、如來樣を疑りぬき、恨みぬいて御困らせ申したことは、實に〳〵、どれ程だか、計り知る事は、到底出來ません、よくも〳〵如來樣は、如何にも罪の深い、此んな罪惡の塊りの小僧を、今迄御見捨て無く、御救ひ下さる事と頂いた時は、實に嬉しいとも、有難いとも、何とも、其の時の私の心の中は、到底口て云つたり、筆て書く樣な事は出來ません、それからと云ふものは、死ぬ事を少しも恐ろしいと思はず、只だもう有難いので、感謝の念佛を稱へて、喜こんて居りました、處が不思議にも、御信心を頂いて、急に安心が出來たせいか、病氣の苦痛も追々忘れて、身體の樣子も前とは非常に變つて、氣分も大變能く成りました、而して心の中は何んとも云へ無い、喜びが有りまして、常に念佛を申して樂しく、愉快に日送りを致して居りました、すると、其の月も無事に過ぎましたが、身體に別條も無く、少しも死ぬ樣な樣子も見へ無いので有りましたから、私も非常に嬉しく感じまして、益々如來樣の遣る瀨無い、御慈悲を喜ばして貰ふたので有ります、それから醫者が來て、私の身體を診察して、非常に驚ろいた樣子て、是れは不思議だ、肺も落付いて來たし、熱も追々と無くなつて來たから、こんな樣子では死ぬ樣な事は無い、もう大丈夫ですと、醫者も大變喜こんて呉れました、而して御信心の御德は、大層な物だと感心をして、歸りました、私は其の時も、實に如來樣の御慈悲の如何にも、深い事て有ると、益々有難く、感じさして頂きました、若し私が彼の時、醫者の口から五六日の内に死ぬと云ふ事を聞かなかつたら、未だ御信心を頂くどころては無く、益々煩悶をした事て有りましようが、醫者が此の事を申して呉れた斗りに、斯く迄深い、廣大無邊の御慈悲と、頂く事が出來たので有ります、私は此の時思ふに、實に是れは、如來樣が、醫者の口を貸りて、申して下すつた事て有ると、深く喜ばして貰ひました、斯樣な有樣て、毎日喜び〳〵、日暮しをさして、頂いて居りました。

それから尙私の信仰心を、一層强めて貰ふたのは、恰ど九月の二十日頃だと覺へて居ります、それは近角先生の講話の度によく御世話をなさる小澤さんと云ふ方が有ります、此の方は、大變親切な人て、毎も〳〵私の病氣の事を尋ねて下すつて、非常に有難い、御信者て有ります、それて其日も小澤さんは、私の枕元に御出てになつて、どうてす、安心が出來

ましたかと、尋ねて下さいましたから、私は其の時、小澤さん今度と云ふ今度は、眞に疑が晴れて、心から如來樣の遣る瀨無い、御慈悲に氣が附いて、大安心をして、喜ばして貰ふ事が出來て、此樣な嬉しい事は御座いませんと、種々有難い話しを致して居りますと、小澤さんが、五月の求道を出して、其中て近角先生の御自督の、前念命終後念即生を、有難く讀んて下さいました、私は其の時、床の中て寢て居乍ら、此樣な、結構な御話しを、讀んて頂くとは、實に廣大な阿彌陀樣の御恩が、今更の樣に、深く味はして頂きましたが、實に考へれば、勿體無い小僧て有ると、慚愧な次第て有りますが、如來樣は、此云ふ起きる事も、容易に出來無い樣な、此樣な小僧を可愛相だと思召すが故に、小澤さんを、私の枕元に御使はしになつて、遣る瀨無い御本願の御慈悲を、御話しなすつて、此の小僧を御救ひ下さるのかと、思へば、實に其時は、餘り有難いやら、嬉しいやらて、思はず知らず、歡喜の涙がこぼれて、暫時は報謝の念佛を、申して、喜びました次第て有ります。それからは身體の工合も追々よろしく成りましたので、今度は御說敎だの、講話などは心から聽聞する樣に成つて、聞けば聞く程、益々喜びの念が、增す斗て有りました、其の中でも、近角先生の講話は、如何にも心から自分に對して、有難いので、始終樂しみに、土曜日の來るのを待つ樣な次第て、毎日〳〵報謝の念佛を稱へて喜こんで、日送りをさして貰ふて居りました。

さて恰ど十一月の十二日と成りました、其の時もやはり如來樣の遣る瀨無い、御慈悲を知らして頂き、喜びましたのは、外の事ても有りませぬが、例年私の家ては、十一月十二日の日には、必ず報恩講を勤めます、此の日には、同行衆が多勢參詣に御出に成ります、而して其の參詣の人にはそれぞれ粗飯を出しまして、御經だの、有難い御說敎だのを聽聞して、共に共に其の日は滿足に喜ばして、頂くので有ります、私も未だ病氣の出ない、丈夫な内には、少な衣を附けて、立派な僧侶方と一所に、報恩講の御經を勤めたので有りますが、今は此樣な重病に掛かつて、起きる事も容易に出來ない有樣て有りますから、御佛の前に跪まづき、結構な御經を上げる事も出來ません。尤も私しとてもそれは、幾ら起きられ無いと云つても、人に起して貰ふとか、又は自分ても、是れは是非起きなければなら無いと思へば、起きて起きられ無い事は、有りませんか、唯だ身體がたいぎて、自由に成ら無い物ですから、起きずに聽聞をして居りましたが 今僧侶方が報恩講の御經を上げて居る 彼の御和讃の中に何んと書いてありますが、實に『如來大悲の恩德は、身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩德も、骨をくだきても謝すべし』と親鸞聖人は、御仰せに成つたては有りませんか、斯樣に御和讃の中に申して、有りますのに、私は何故か、此の一年の中て、一番大切な、報恩講の日に、寢て居乍ら、御經だの、御說敎だのを、聽聞して喜こんで居るとは、實に勿體無い奴とも、圖々しい小僧とも何んと云つて、如來樣に申譯けをしてよいのか、申し上げ樣が有りませんが、此樣な罪の深い、如何にも圖々しい何んともして見樣の無い、此云ふ小僧が、如來樣は眞に可愛相だ、哀れだとお思召して、御救ひ下さるとは、何たる廣大の

御慈悲ぞと、思ふと、餘り勿體無いやら嬉しいやらで、今度は自分で起きて床の上にすはり、如來樣に御禮を申して、深く喜こびましたので有ります、斯樣な次第で、報恩講の日も無事に合はして頂く事が出來ましたので、私は非常に有難く感謝を致して滿足に其日を過ごさして頂きました。

處が、又其月の終りに私は、死なゝければなら無い樣な運命に成つたので有ります、それは二十三日の日に大變熱が出て、苦しく成りましたから、急いで醫者を呼び、診察を致して貰ひますと、醫者が云ふには病氣が急に變更して、來たから氣を附けよとの事で有りましたから、私も其の積りで、藥も正格に飲み、一生懸命養生を致し、何事も、醫者の云ふ通りにして居りました、而して苦しい中からも、御信心を頂かせて貰ふた御陰げに、御念佛を申して、喜こんで居りましたが、どうも身體の樣子は、日に增し、惡く成る斗りで有りました、それから恰ど、其の月の廿九日頃でした、醫者が今日か明日かの內に死ぬかも知れませんと云ひましたから、父は要心の爲め、親類へ、此の事を、通知致しました、すると親類の者は、驚ろいてかけ附けて參りました、私は此の樣子を見て、斯樣に親類が、かけ附けて來る樣では、私の命も最早や旦夕に迫つて居る事は、目に見へて明らかで有りますが、私も今では如來樣の遺る瀨無い、御慈悲を其儘頂いて、大安心を致して喜こんで居る者で有りますから、今此處で、愈々死なねばならぬのだと、思ひましたが、別に恐ろしいと云ふ感じも起りせんでしたが、唯此の世が何んと無く懷かしくて、仕樣が有りませんでしたから、死ぬ事は厭で有りましたが、其の時私は、彼の歎異鈔の中に『名殘り惜しく思へども娑婆の緣つきて、力なくして、おはる時彼の土へはまるべきなり』と云ふ御敎化は、實に此處で有ると、私は今更の樣に、有難く感じさして頂いたので有ります、而して廣大な、如來樣の御慈悲に氣が附き、御信心を頂かして貰ふて、喜こんで居る、此の私が、今此處で死ぬ事が厭だなどとは、實に淺間しい御恩知らずの小僧で有ります、眞ことから云へば、死ぬのが厭やどころか、今此の呼吸が切れたなら、結構な御淨土に參る事が出來るとは、何と云ふ有難い仕合せ者で有ると思つて、それこそ飛び立つて、喜ばず無ければ無らない此の私が、死ぬ事が厭やだなどとは何と云ふ勿體無い小僧で有ると、思へば、實に慚愧の至りで有ると、其の時は、涙を流して、泣いたので有りますが、如來樣は、此云ふ死ぬ事が厭やな樣な、こんな罪の深い、實に御恩知らずの何んとも、仕て見樣の無い此の小僧をよくも、御見捨て無く、御救ひ下すつて、如來樣は、私に決つして心配するな、其儘直ちに來い、我は必ず汝を落さんぞよ、若し汝が地獄に落ちたなら、我は決つして佛にはなら無いとの、御勅命を頂いたのは、實に此の小僧一人で有ります、而して實に此の一呼吸〳〵が、御淨土に近つくので有ると思へば、眞に有難いやら、嬉しいやらで、益々報謝の稱名を稱へて、深く喜ばして、貰ふたので有ります、斯樣な有樣で死ぬのを待つて居る樣な次第で有りましたが、未だ一向死ぬ樣な樣子も見へ無いので有りました、如來樣は、未だ此の者は淨土に行くのは、餘り早や過ぎるから、最少し此の世の無常を感じさして、愈々御信心の德を味はさして、やろうどの有難い思召して有りましたのか、それからは、決つして死ぬ樣な樣子も無く、追々病も衰ろへて、參りました、實に如來樣は私に、未だ大切な命を御貸しなすつて下さいましたので有るかと思へば、實に嬉しく、如來樣の御慈悲は、如何にも廣大無邊で有ると、愈々深く御信心の德を味はして頂く事が出來ました。

如斯き次第で、益々報謝の稱名を申して喜こんで居りましたが、今又十二月の大晦日の日に、如來樣の御慈悲を喜こばして頂きました、是れを申すと、皆樣は私の事をよく種々な事を申す小僧だ、もう好い加減にやめればよいと、思召す方も御座いましようが、最少しの辛棒で有りますから、よく御判讀を願いたいので有ります、それは大晦日の晩に、私は思ふに、今年の八月頃迄と云ふものは、未だ如來樣の御恩が、眞にわから無いもので有りましたから、種々と自力根生を思ひ起しては、如來樣を疑ぐつたり、恨んだりして、御苦勞を御掛け申した事は、實にどの位いだか、到底我々の樣な、泥凡夫の小僧が、どうして計り知る事は出來ませんが、是れに附けても、思ひ出せば、去る八月の廿日頃醫者が、私に死ぬと云ふ事を申して呉れた、其の御陰げに、今と云ふ今は、斯く迄深い如來樣の御慈悲を其儘頂き、喜ばして貰ふて居りますが、若しも彼の時私が、醫者の口から死ぬと云ふ事を聞かないで、御信心を頂かずに死んだら、どんな有樣でしようか、其れこそ無間地獄に眞倒かさまで、今頃は非常な苦しみを受けて居らなければなら無い事だと思へば、實に恐ろしく感じますが、又考へれば有難い事で有ります、私も今迄命が有つて、毎日喜び〳〵樂しく報謝の念佛を稱へて日送りをさして戴く事が出來ましたが、未だ是れからも、私は如來樣から命を御借り申して、此の四十三年の大晦日も、無事に越して明くれば四十四年の目出度い新年を迎へる事が出來るかと思へば、ひとへに、大慈大悲の阿彌陀樣の實に廣大なる御恩が、愈々深く味わせて頂く事が出來て、非常に有難く感じさして貰ひました、それから其の晩も過ぎましたので、結構な御正月を迎へる事が出來ました。

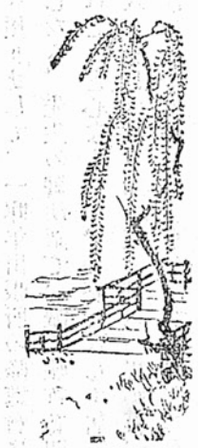
かくて三が日も無事に祝ひまして、七日の日に第三求道會の、未だ四十四年に成つてから始めての講話が有りました、其時近角先生は、先づ御出でに成つた皆樣に新年の御挨拶を御濟しに成つてから、偖而皆さんも、斯く目出度い新年を迎ふるに附けて、愈々御信心を頂いて喜ばなければなりませんと、順々に如來樣の遺る瀨無い御本願の御慈悲を御話しに成りました、其中で先生は、買物の御喩ひを有難く御話し下さいましたので、それを聞く成り、嗚呼私は去年の八月の末迄は今此處で先生が御話しになつて居る、買物の御喩へ同樣な有樣にやれ此の品は僞物では無いか、惡い品ではないか、或は他の店より價が高くは無いか、未だ他の店にも此の通りな品は有るだろうと種々な疑りを起して居るのと同じ事に、私もやれ御信心が頂け無いの、如來樣は何ぜ私を早く救くつて下さら無いのかなどと、此樣なつまら無い疑りを起しては、自分で自分の心を煩悶さして、苦しんで居りましたのが、去年の八月の末に、前にもくわしく申し述て有る樣な次第で、急に如來樣の御慈悲に氣が附いて、御信心を頂かせて貰ふた時は、

嗚呼如何にも有難い御慈悲で有る、私は此樣な有難い御慈悲を、何ぜ早く頂かなかつたのか、何ぜ早く氣が附かなかつたのかと、自分が是れ迄煩悶をして苦しんだ事が、わから無い樣に成つて、今度は何ぜ私はあんなに、煩悶したかと、自分で煩悶した事を疑る樣な次第に成つたので有ります、それで其の買物の御喩へが、如何にも自分と同樣な御喩へて有つたので有ると、其の御話しを聞いて非常に有難く感じて、益々喜ばして貰ふたので有ります、それから講話も濟みましたので、先生は私の枕元に御出で下さいましたから、私は新年の御挨拶を申上げて、偖而先生私も宗祖親鸞聖人の御蔭げや先生の御蔭げによつて、結構な如來樣の御慈悲を頂き、喜ばして貰ふ事が出來て、眞ことに私の樣な仕合せ者は無いと始終喜こんで居りますが、實に今日の買物の御喩へは、如何にも際立つた有難い、御教化で有りましたと、御禮を申し上げますと、先生は、今日の講話は非常に際立ちましたが、能くわかりましたか、其れは結構でした、是れに附けても御前さんは、年の若いのによく御信心を頂いて、喜こんで居るとは、實に仕合せ者で有りますねと、先生も大變に御喜び下さいました。

私も此頃は夜に成ると、例も父と寐て居乍ら、如來樣の御慈悲の事を共に話しをして報謝の念佛を稱へて、喜び乍ら寐るのを何よりの樂しみとして居りますが、父が例も私に云ふのに、御前が此の樣な病氣に掛つたのが動機と成つて、結構な御信心を頂き、喜ぶ事が出來たので有るが、若し是れが病氣も起らず、すら〳〵と、丈夫に育つたなら今頃は中學校に居て、勉強に追はれて、御信心の話しを聞くひまも無いから、到底此樣な結構な御慈悲を頂く事は出來無かつたろうが、かへつて病氣に掛つたのが、仕合せと成つて喜ぶ事が出來るとは、御前の樣な仕合せ者は無い、實に御前の病氣は、眞に如來樣からの恩寵で有ると、益々喜ばなければ無ら無いと、云つて下さるので有ります、私は、如何にも父の云ふ通り、眞に私の病氣は、如來樣からの恩寵で有ると、頂いて見れば、愈々廣大無邊な御慈悲と、有難く思はせて貰ふ斗りて有ります。

どうぞ皆樣、未だ御信心が頂け無いの、安心が出來無いの、心の疑がいが取れ無いのとか、或は御信心を頂だいたら、急に樂になれる物だろうかとか、御信心を頂だいたら、始終喜び通しに、喜べる物で有るかとか、或は決つして、煩惱の厭な心は起らないのかなどと、此樣なつまら無い、御考へを御持ちになら無いで、一日も早く、御信心を頂く樣に御願ひ致します。それは幾ら御信心を頂いて安心したからと申しても決つして、そう始終喜び通しに、喜べる物では有りません、やはり、御信心を頂か無い前同樣に、煩惱の厭やな心も起りますし、或時は腹を立つておこる事も有るし、嬉しい事も有るし、悲しい事も有る、又樂しみも、面白い事も有るし、樂くに成つたかと思へは、直ぐ苦しく成つて來ると云ふ樣な有樣で、心は始終變化して、煩惱の火は盛んに燃へて居りますが、其の煩惱の起こる其の下から、此云ふ種々な、厭やな事斗り思ふ、實に此樣な淺間しい、罪の深い、何んともして見樣の無い、此の小僧が、如來樣は如何にも可愛想だ、哀れだと、思

召して御救ひ下さるのかと頂けば、實に私し程仕合せ者は無いと、益々喜ばして貰ふ事が出來るので有ります。此云ふと皆樣は、私の事を、未だ何にも知ら無い、年若な小僧が、信心は此云ふ有樣、安心は斯樣な有樣と、種々有難く申すが、生意氣な小僧だ、今更此樣な小僧から聞かずとも、其の位の事は先に承知をして居ると、御思ひになるか存じませんが、御信心を頂くのは、唯だ聞いたり、理窟を云つたりして居る間は、なか〳〵御信心を頂ける物では有りません。而して私は最後に、此告白に對して一言申し述べて置きたいのは、唯だ賢明な皆樣方が、一日も早く、結構な御信心を頂き、大安心を致される事を、ひとへに、御祈り申すと共に、今迄私が、自分の御信心を頂く前の有樣、及び御信心を頂いてからの有樣を、種々長々と書いたのは、決して私の力で書いたのては無く、大慈大悲の阿彌陀如來が此の小僧に、御智慧を御貸し下すつて、書かせて頂いたので有ると、深く自分で信じて居る次第で有りますから、どうぞ皆樣も、此の告白を御讀み下さるに附けても、能く此の處に御考へを御持ち下すつて、御判讀下さるれば、是れ程私の幸福は有りません、而して私は御信心を頂いた、皆樣方と共々に、手を引き合ふて、命數が盡き、此の娑婆の緣が切れて、臨終が來るなり、其時は、結構な御淨土に參らして、頂く事と致しまして、其れ迄は、一日も餘計に、生き延びて、報謝の念佛を稱へて、喜ばして頂けば、愈々如來樣の御慈悲の如何にも深い事を益々有難く味はせて貰ふ事が、出來るので有ります。誠に何度も〳〵申しますが、私も唯今は心に少しの疑ひも無く、如來樣の遣る瀨無い、御慈悲より他に御すがり申す方は無いと、如何にも、眞から大安心を致して、喜こんて居る仕合せ者て有りますから、餘り自分の頂いた御信心が有難いので、思はづ知らず、此樣な、何にも知ら無い樣な小僧が、筆長々と、まずい文章を書きました事は、賢明な皆樣に對しても、如何にも御氣の毒な事て有りますし、又大切な記事斗り書く、此の雜誌に對しても、實に濟みませんから、未だ種々と申し上げたいのて有りますが、前にも申す通りな次第て有りますから、是て筆を止めて、後日又御話し申す機會が有れば、其の時はゆるりと、御相談を申して、共に喜ぶ事に致しまして、先づは賢明なる皆樣よ、今迄斯く長い、如何にもわかり難い文章を、御判讀下さいました事を、ひとへに御禮を申上げる次第て有ります。先づは是れて終りを告げる事に致します。南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵。



地獄は一定すみかぞかし

坂倉はま子

先生より告白を書けとの御仰せを蒙りまして、實は何事もわきまへぬ、至つて無學な、私て御座いますから、御斷りを致しました處、是非にとの御仰せに、先生の仰せを如來樣の仰せと、御無禮をもかへりみず、御受けを致しました。私は誠に佛法有緣の土地に、生れさせていたゞきまして、其れに幼少な時、兩親に分かれまして、はらからとては一人も御座いませず、段々成人致しますに付けまして、誠に此世が便りなく、あじさなく存じて參りました處、お手次ぎの信最寺樣と申す御方が、誠に御信仰の厚い御親切な、御方て御座いまして、如來樣の廣大なる、御慈悲の程を、日夜御聞かせに預りまして、一時は非常に有がたく、眞の信仰に入つた事と、其後も難有日暮しさせていたゞいて居ました。然る處、一昨々年、良人の都合で、東京へ轉宅致す事に成りまして、其後佛緣にも遠ざかり、致して居ました處、ドーモ、以前の樣に如來樣の御恩が喜べませず、我身の惡ひと申事が、少しも思へなく成て參りました物ですから、何となく心細く、不安な心地が致して參りました、最其以前より一時の樣に、如來樣の御恩がしみ〳〵と喜ばれませず、我身の惡ひと申す事が、ドーモ思へ無く成つて參りました、けれど何も喜ばれなくとも之て好いのじや、之なり如來樣は御助け下さるのじやと、自身てソーきめ込んて居ました、けれど何となく氣にかゝる樣に成つて參りました、一昨年四月、母の年回に、專修寺派出張所の富山樣を御頼み致しまして、其れから御心易く成りまして、色々と御聞かせにも預りまして、一昨年出張所の降誕會に、參講させて頂きましたら、先生の御法話て、誠に難有聽聞致しました、其後かれこれと心ならずも、日暮し致して居りましたけれど、ドー致しましても、如來樣の御恩の程が喜べませず、實に〳〵心さむしく感じて參りましたから、どこか御聞かせに預る御方は御座いますまひかと、富山樣へ御尋ね致しましたら、本郷森川町の求道學舍では近角先生の御法話が毎日曜日に御座いますとの事を承りました處、其翌日が日曜日て御座いましたから、早速前後のわきまへも無く、ぶし付けに參講させていたゞきまして、其後も御法緣にあはしていたゞいて居ました處、間もなく先生が夏季の傳道に御出ましに成りまして、七月の二十五日には一度御歸京、御法話が有ります樣に伺つて居ましたから、伯父と、同道參講させて、いたゞきました處、御法話は其前日廿四日て、御座いましたソーて、其時生がある青年の御方に、御法話遊ばして、御出て御座いまして、私も側て聽聞致して居ました處、伯父が歸ると申しましたから、やむをえず御挨拶致しました處、先生があなたは如何かとの、御尋ねを蒙りましたから、びは御助けには間ちかひないと存じまするがと、御答を申しましたら先生が、助かるべき者てなき者が、御助けに預るのじやからと、斯樣に仰せをいたゞきましたから、實に〳〵驚きまして、歸宅の道すがら實に〳〵私は心あちがひを致して居たと、實に〳〵驚きまし

て、其節七月の求道をいたゞひて參りましたから、歸宅後伯父と共々拜讀致しました處、横着心に遠慮心との御法話て其れを拜讀致しまして、實に〳〵私は横着心も此上もなき横着な私て有づた、成程信仰に入つた者なれば、皆樣の樣に御喜びが出るがあたりまへ、又佛恩報謝も皆樣の樣に出來るが當然の事と、思へば思ふ程、してみようのなき横着心な私て有ると、心付きましてからは、夜分もなか〳〵床に付きましてもやすまれませず、よく〳〵考へますれば、考へます程、如何にも私はきはまりの無き、横着者て有ると存じまして、實に其時の心持ちと申しましたら何とも斯とも申し樣もない、慚愧の心が出て參りまして、先生に一度御聞かせして預り度いと存じましても、先生は御不在中て御座いますし、求道も伯父が持ち歸りましたから、それなり拜讀も致しませず、ある日伯父が宅へ參りましたから、最も伯父は信仰にも入て居る人て、永年聽聞も致して居る人て御座いますから、伯父にも話しを致しまして尋ねました處、其れはまだお前は聞き樣がたらぬからじや今しばらく聽聞すれば分つて參るなど、申して居られますし致しますから、富山樣へ御伺ひ致しまして、御尋ね致しました處、まだ本月の求道は、拜讀致さないから、何事も分りかねるけれど、私の考へては、あなたは、如來樣の御手元に、此上もない結構な家を、立て頂いて居ながら、我あばらやをコーしたら少しは、見よく成るか、アー致したら、少しは好く成るかと自身の手元ばかりながめて、如來樣の御手元を見ずに居るのでは無いかと、色々おさとしに預りましたけれど、ドーモはつきり致しませずに歸宅致しました、其の後伯父が、是を一度拜讀致す樣にと、利井鮮妙樣と申す御方の、歎異鈔の御法話を貸して下さいましたから、其れを拜讀致して居ましたら、歎異鈔第二章の「いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と、そこを拜聽致しますなり、アー私は、どこまて横着心の者て有るか、少しにても喜べる樣な、我身と思て居たは、此上も無い大間ちがいて有つた、いづれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし、此樣なしてみようのないあさましき私を如來樣は、あはれと思召しての、御本願で有たかと、實に〳〵難有感謝の涙が止め度もなく出ました、其處〳〵泣きくづれて、仕まいました、只今思ひ出しましても只々感謝の涙の外、何事も書く事が出來ません、其後は心に少しのわだかまりも御座いませず、さながら惡しき病氣にかゝりて居た體が一ぺくのお藥て、直すつかりきれいな體になをして頂いたと同樣な氣が致しまして、只々如來樣の廣大なる御恩の程を、日夜喜ばさせていたゞひて居ます、其後御禮がた〳〵先生の御宅へある夜御伺ひ致しましたら、先生御食事中て應接の間にしばらく御待ち申して居ましたら、お机の上に求道が御座いましたから、何心なく拜見致しましたら横着心に遠慮心との御法話の求道て御座いまして、又今さらの樣に、拜讀致しましたら、其内に最も適切な御話しが御座いまして、一しを難有拜讀致しました、其内先生も御出下さいますし、色々難有御話しを伺ひまして、誠に嬉しく歸宅致しました。南無阿彌陀佛〳〵。

時報

昨年中の信仰談話會

卷を改むるに當り、例年の如く求道學舍及び第二求道會信仰談話會に結緣の御同朋の芳名を錄する事次の如し。吾人は年々歲々、面變り無き慈光の照護により、求道學會第二第三求道會とも、年と共に法緣益々熟し給ふを思ひ彌增し感恩の情に堪えず。

◎求道學舍信仰談話會出席人名

近角常觀、長尾收二、瀧澤三郎、小南英策、小田島德藏、大石五一、川村貞治、淺野孝之、川上法勵、原熊吉、村上麟圓、笠木輔一、川本宇之介、井部克太郎、五十香元進、神保達晃、須藤堅正、七尾環、長澤惠海、居本道圓、神谷三郎、小松原謙三、勝沼精藏、能勢獻一、太田七造、山名龍宣、綾部康雄、小倉闡敎、中野伊三郎、向坊久五郎、齋藤敎慧、香川靜爾、佐藤直丸、安村行雲、龜谷凌雲、丸茂猛、古泉幾太郎、牧田平太郎、村上義一、本谷すむ、栗田ひさ、伊部千代松、竹原徹音、西本龍山、佐藤兵太郎、宇佐美英太郎、横田松子、宇野いね、近角きそ子、堀澤操、佐野川たね子、松下要子、海惠たみ子、由雄なを子、長谷部貞子、貝田清右衞門、小出はや子、自在丸伊惠子、岡部たみ子、丸茂むね子、長尾かず子、山田乙治郎、柳原慈乘、冠松二郎、有田義之介、鈴木弘、近角常音、碓井半二、百目木智璉、宇野はつ、安藤つたゑ、大地原誠玄、林喜策、小川喜藏、岩永法電、湯澤幸吉郎、石曾根勝一郎、佐伯正、菅原廣濟、日野顯立、小野一郎、蒲田良三、須山隆丸、高橋孜之、野口傳藏、羽生もゝ代、島松しの、園千鶴、松島なみ子、荻野ふさ子、姉崎そて子、小松のぶ、中村金藏、角谷八三郎、小林昇、鈴木源司、畑新次郎、佐藤清一郎、井上龜太郎、三川一一、藤谷堯、福田敬三、尾野敏雄、高畑猛夫、吉田吉治、前田義太郎、香春建一、齋藤止祐、井口乘海、葦原雅亮、名倉清平、吉田まん、牧田きせ、野尻みよし、織江祐道、相良唯心、松島龍曉、酒匂なを、松本彦次郎、森脇忠市、小泉清治、生沼きく子、角谷すま、西山ゑつ、小澤一、武本雄太郎、大河內貞、小粟栖國道、水野忠彦、有田喜太郎、井上豐忠、佐藤昭、松崎慈淳、林忠次郎、山本智道、谷口次三郎、大河內やゑ、佐野川信夫、碓氷はる、杉浦はん、石崎竹子、葦原信、岡田菊僊、鹽津薫、深萱八郎、茂木佐平治、淺野義人、淵上寛、牧野大助、於保介藏、宇野圓眞、林田善靈、小原いと、佐々木慶誠、山田小三郎、青木正勝、北村しづ、清水かつ、坂倉はま子、杉浦こう、綾部りく子、藤岡そと子、柳原政雄、三好馬康、今田侈、長谷川良信、佐藤貞吉、宮澤磯吉、井上玄一、近藤清作、原田たか、原田純藏、大島一郎、平田富厦、山中見道、塚原子支、永井光子、德永てる子、中野てる子、榊原彌生、佐藤新二、佐藤正二郎、前田太郎、三須善太郎、西野鎌治、藤本兼吉、中市謙三、杉崎大愚、松島幹夫、兒玉信義、高橋惠眞、富岡敎雲、香椎純一郎、橋川光子、猪

股照治、上野ゑい子、廣田康、上田貞雄、那須皓、那須凌岱、今井せい子、那須とく子、百澤さき、明山晃赫、丸山新次郎、池田和市、波島泰壽、鈴木龍司、福島儀作、吉田庄七、金子滋野、井上澄江、佐竹圓明、牧野純一、館志ん、林しづ子、井上冬子、小林しづ、中原眞敎、田川茂平治、吉藤寅龍、前田宗一、調圓理、淺賀佐惣次、松本ひさ子、野坂むら、竹原靜子、外村林吉、田中克明、三田安、鳴瀨なか、山名はなの、

◎第二求道會信仰談話會出席人名

近角常觀、鈴木磯一郎、小南英策、渡邊さた、木山はや、加藤てる、生沼きく、尾家藤藏、寺井庄太郎、阿部愛知、眞島はる、眞島すや、大久保魁、於保介藏、關二十郎、本谷惠照、田中克明、菊池なほ、中村淸一、須藤堅正、前田雄三、尾野敏男、柿原聽義、高世喜內、石川銀太郎、瀧澤三郎、醍醐源作、今村つる、宇野いね、小澤はる、鈴木ふじ、根尾謙兒、上原二郎、德永郁子、丸山ふゆ子、岩永恒、高宮謙三、川本宇之助、山本敏彦、藤本兼吉、荒川實、和田粗佛、村田祐吉、馬奈木文助、篠原房治、柿原慈乘、小粟捨藏、竹內專助、鈴木市郎、向坊久五郎、梶井恒、長尾收一、橘川光子、葦原雅亮、田中治八郎、佐藤正雄、安田良忍、井部克太郎、小澤一、吉岡俊亮、吉岡茂、中村金輔、佐多みどり、田代たみ、三井光彌、水井文藏、龜谷凌雲、小林のぶ、松崎壽三、福本謙治郎、沖鹽政次、大石五一、高山賢作、高山りう、小松原謙三、牧田平太郎、牧田きせ、小澤淳子、藤谷竟、桑原よし、增村ちく、渡邊勘一、蓮岡法麟、本多惠孝、市野修造、池野最平、佐藤ゑつ、澤とき、太山りう、藤野君枝、小林昇、長尾かず、弘中まち、弘中ちよ、原田純藏、稻益たけ、有田義之助、及川銀太郎、有田廣、村井勝三郎、三須善太郎、今田侈、高橋卯平、上田貞雄、村井かつ、平田さわの、三浦龜治、關定次郎、森脇忠市、大場作治、志賀昌之、日野顯立、安西長次郎、湊鉄子、湊八重子、青葉達吉、栗田善次郎、大橋彌助、吉藤寅龍、坂倉はま、

本誌一月號休刊仕候間左
樣御承知被下度候也
求道發行所

◉信心のたより

南無阿彌陀佛〳〵〳〵、近角先生！、私は何たる仕合せ者でしよう！、思へば思ふ程不思議に堪へませぬ、と申すは、私の思望が皆充實される事であります、第一九歳の頃より三十三歳迄煩ひ悶へし後生の一大事は、明治三十三年に先生御著の信仰の餘瀝に依つて即時に疑團氷解して、人生の目的を遂げさせて頂き、久遠劫來長夜の暗鬼は慈光に照破せられて唯だ感謝の御念佛のみ殘り、爾來未見の恩師として御慕ひ申せし先生には、明治四十年の春に、而も先生より此の罪の兒に御傳道旁御出向ひくだされて、茲に第二の思望を御充たしくだされ、第三には是非一度は先生の御教壇求道學舍を御訪ひ申したしと期して止まざりしに、突然にも今四十三年十二月十七日出京の機を得て、是亦た數年來の思望を充さしめ給ひました、然れども尚ほ望蜀の念は、若し能ふべくば學舍で恩師に接しまつりて一語にても御法話を拜聽することを得ばと期する事でありました、併し是れは求道の聲所々に漸く切なる現今の事なれば恩師は其の聲に御應へなさるゝ爲め御他出にて、九分九厘は此の望を絶ちて居たのです、豈に圖らん學舍に至れば師ませりと承はり、實に望外の事とて云ひ知れぬ思ひに在る中に師の恩容見はれ給ひて、早や師出で迎へ給ひしは、更に感を深くして勿體ないやら御懷つかしひやらで胸は張り裂く斗りにて、彼の感泣の體で言の葉も出てなかりたのであります、夫れより十八日の日曜講話を拜聽し、來聽の人々の新に入信せらるるをも實見させて頂き尚ほ信仰談話會に於ける先生の御懇切なる御諭しと御體度などより、二十四日御暇を申して退舍歸途に就く迄、悉く私一人の爲めに御骨を折りくだされしこと、何とも御禮の申し上げ樣も御座いませぬ、私は彼の十九日の夜に在舍中の所感を記し度く筆執り初めしも、書きもて行けば行く程に感益々多くして、遂に統一し得ずして筆を投げたのであります、私は御舍に在りし間常に吉水の禪房も斯くやと感じさせて頂きました、而して求道の各姉兄が皆な私一人の爲に告白してくださるゝと私は感しさせて頂きました、又御聖敎拜見の御注意迄も先生より御諭しに預り、二日二夜の私の在舍させて頂きました私に取りての利益は、私の過去には彼の信仰の餘瀝第一章を拜讀せし時を除きては、其の他に無き幸福を得させて頂きしを感謝させて頂きます、

私は二十日午前九時四十分上野發列車にて、同日午後一時四十分頃前橋に安着致しました、何故斯くも無事に不足なく思望を充實させて頂く事かと不思議に存じます。

明治四十三年十二月二十二日

山崎震雷

近角常觀著作

訂正増補 信仰之餘瀝

第拾壹版 定價卅錢 郵稅四錢 袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なく苦悶の黑暗界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歲の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心の實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其十一版を出すに及び本書を緣として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、而して先きに第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に增補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附錄として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん。

人生と信仰

第參版 定價卅錢 郵稅四錢 袖珍美本

◉第一章 人生問題と信仰 ◉第二章 悲觀思想と信仰 ◉第三章 倫理力行と信仰 ◉第四章 犯罪心理と信仰 ◉第五章 社會問題と信仰 ◉第六章 國家秩序と信仰 ◉第七章 世界宇宙と信仰

本書内容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的敎訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脫せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

親鸞聖人の信仰

第貳版 定價七拾錢 小包料八錢 クロース綴

親鸞聖人の『敎行信證』は、聖人が一代の信仰經驗を結晶して、他力信仰の本源を闡明し給ひたる眞宗根本の寶典也。而して本書は著者が入信以來起居常に此の寶典を以て自己が信仰の指針となし、日夕拜繙熟讀の餘、茲に初めて其の實驗信味の餘瀝を編述したるものとなす。幸に有緣同朋の士、一讀を賜はん事を。

發行所 東京振替口座東京一六六九六番 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

大遠忌御法會記念

親鸞聖人號

四月五日發行　三百頁以上　一部代三拾錢　郵税二錢

只念佛して彌陀に助けられまいらすべしとよき人の仰を被りて信ずる外に別の仔細なきなりと御述懐遊ばされたる親鸞聖人の御法會が愈々四月拾八日から京都に於て御修行になります

吾等道弟は徒に拾餘ヶ國の境を越えて京都に群參するを以て足れりとは、申されぬ、

仍りて、ひとへに往生極樂の道をとひきかんが爲めでなければなりませぬ本社茲に全力を盡して他力易行の大法を宣傳すると宗祖の御偉德を讃嘆するとの目的を以て增大の聖人號を發刊せんと企てました何卒諸賢一本を購ふて眞面目な讃仰を味はつて淸き四月を空しくしない樣に願ひます

東京府巢鴨眞宗大學内

發行所　無盡燈社

振換東京四二六八

道光

定價一部金三錢
十部金三十錢
前金に限る
毎月一回廿五日發行

第四年第一號要目（一月二十五日發行）

- ●法界統一の宗教を有する大和民族
- ●聖人の私淑したまひし曇鸞大師
- ●親鸞聖人
- ●道光錄
- ●日曜學校日誌
- ●佛樣の國にかへられた淸ちやん。

京都市坊城通八條下ル東寺町二十四番戸

發行所　道光發行所

施本用小册子

信仰之餘瀝要略

第二版

定價五錢　郵税二錢　部數に應し充分割引す（但シ四册迄は郵税二錢也）

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

冠頭 唯信鈔文意

新版

定價七錢　郵税三册迄貳錢（部數に應じ充分割引す）

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一册にまとめて刊行す。冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て敷異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

東京市本郷區森川町一
振替口座一六六九六番

求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回十五日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事。
一　郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	郵税一册に付五厘

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十四年二月十二日印刷
明治四十四年二月十五日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

東京市神田區表神保町
大賣捌所　東京堂

前號要目

求道

◎朝家の御爲め國民のため念佛申すべし　須藤堅正

講話

◎香光莊嚴　近角常觀

慶讃

◎君則、臣則　近角常觀

（十七憲法第三條）

告白

◎底拔けの懺悔

自督

◎歳晩の感謝

（不斷煩惱得涅槃）

雜

◎信仰書簡六

求道第八卷第一號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十四年二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

東京市牛込區矢來町二ノ一三　光榮印刷